首書土佐日記纂注

下

無窮會
京都大學
圖書之印

首書土佐日記纂註巻下

日向　坂田諸潔　閲
攝津　楠寄隆存　纂注

啓
純

十日。那波（なはこの定）のとまりより

久しぬ〻解スヘシ

十一日あのりまよ舟を出して宇津を却人うれすぐ

移れ（やうの定）ありて国ルル人えびをそ自をそこてぞ

ゐひんぢをでしぬ〻ぬこのるるあひどまこな夜あ

けくるあらひまいのうとれしてこるるなりぬ

いれしたれとつよふきぬるのまるこのふれ

有明のつきなくゐえし別より曉のかりノ哥ハ古今一部中ノ面白キ哥也ト定家卿ノ説ナリ万葉ニ曉降ト見エ曉ノ頃過行ヲ降ルトイヘリ

室津ハ日本地誌提要土佐部云安藝郡ニ在リ東西五十間南北二町二十間深一仞一尺西ニ向フ礼記内則云凡内外鷄初鳴咸盥漱衣服斂枕簟灑埽室堂及

名をきてたねこゝふかの名のたねあるとゝふまでをきなるまゝハ行ことなれバ人こまゝふ

ときゝ

みちこゝろ乱女まゝハなゝこの雲をゝめふ

まことまて名ふきゝ不たねなゝバとぶゞこ

とくゝ郁子しのなとそゝ

あつつきハ曉ヲ云日本紀ニ鷄明ヲ訓シ萬葉集ニハ旭時ト書リあるとキトモヨメリ明時ノ義也新撰字鏡ニ昕をたネありとキトヨメリ室津ハ和名抄國郡部云土佐國安藝郡室津トアリおふひとみなまゝ等文ノ如ク解スヘシれハのすとゝトハ真淵云髪あげ食

下ノ一

延布席各從其事乾ノ云ハ神代紀ニ涸モヨメリ畫ヨリ出タリヨテ後撰集ニ袖ノひるまトヨメルハ二意ヲカ子タリ又ひし　反ひナリ童蒙頌韻ニ晞ニヨメリ

いましハ日本記ニ爾汝乃等ヲヨメリ坐サノ義西土ニテ座下ト云如シナンチノ古語也新撰字鏡ニ你モヨメリ字類抄云乃スナハ

事などすゝをいみなるてしひゝハ和訓栞巻廿五云神代紀ニ日ヲヨメリ畫モ同シ日ヲハタラカシタル詞也又日中ヲサシテイヘリ伊勢物語ニモ見ヘタリ武備志ニ午ヲヨメル是也いすゝ羽根ねとゝふ所みきぬ是レハ下ノ文ノ二月五日ノ処ニいすゝクルめむれそあそふ所ありトアルト同クテいまゝしノ字助字也考證云ノ和玉篇ニ乃の字をイマシと訓セリ乃ノ字ハ義ハてもこての詞よくきこゝろねとゝふ處ハ前後のつきして考ふるゝいすゝと土佐の國ハうちなるる明らゆゝトリ鳥トハ

をさなし日本紀ニ不賢不叡不肖ナドヲヨメリ長々シカラヌノ義也源氏ニ心をさなく夫木集ニ

ぬしつけのたとろも下
ゐすむええ[illegible]心をさ
なさをいろなせ[illegible]

幼少ヲ云モ美同シ

をさなめハ日本記ニ妾ヲヨメリ麻績各妻ノ美ナルヘシ今モ奥州ナドニハイウ詞ニトソ遊仙窟ニハきんな心トイヘリ

訓セリ神代記ニハ女ヲ訓ス土佐日記ニモむすめノコトヲイヘリ

をくハ神代巻ニ鮮ヲヨメリ糸緒ナトニ云是レ也水ノトクルハ洋ヲヨメリ西國ニテハかくト云ヒ長崎ニテハあひトイヒ佐賀ニテあうバ出羽ニテだヘトイウあひハ阿妣ナルヘシあうハうハ阿母ナルヘシ嫡母ハ父ノ妾ナレ

和名抄羽族部云文選注云羽族謂鳥也爾雅集注云二足而羽者曰禽和名与鳥同土里一説飛曰鳥都了反走曰獸惣謂之禽訓与獸同

ねハ和名抄ニ翮ヲヨミ一云羽根也トミヘタリをきなしハ幼少ナリ日本記ニ小男童女等ヲをぐなトヨメリ是レおきなニ對シタル辞ハナリ古事記ニ少子トモヨメリ女ハ和訓栞巻五ニをみなトアリ新撰字鏡ニ娃又孃ヲヨメリ又うつくしをみなトモ見エ麻績名ノ義ナルヘシ日本紀ノ哥ニみのをとめトモ見エ麻績ノ少女也紀ニ女ノ手末之調トイヘル意ニヤをうなをんなトモ云ハ音便也

まこゝにて等トハ処ノ名ノたねニ鳥ノたねヲカケテトブカコトク都ヘユキタシト云意也

男ル女モこのでとく都へルのれとゐふあれだこ
ゐ妾ようとゐのあ〜ねとげすと思ひて人ゝますす
きずゐのたとゐふとふ〜ハのついでよそすき
むこの孔人を孔もゐいていづきのほまのまるて
ゐよハまてたてのこのれ むすれくだれ〜ほ乃
人のこのれ〜ねでふゐ妾ようのだハさ〜てそのの
へるべ〜なるといふをおれひいて人孔ゐ妾る
世の中ゐ妾ひあれどれこをこふ〜おれひ乃

トモ子ヲ生シテ正妻トナルヲ云継母ハ父再娶シ正妻也養母ハ幼ヨリ他ノ家ニ養育セラレシ者ヲ云慈母ハ所生ノ母死シテ後父妾ヲシテ養育セシメタル者ヲ云嫁母ハ己カ所生ノ母父ノ死後他ヘ嫁シタル者也出母ハ實母ナレトモ父コレヲ出セシ者ヲ云庶母ハ實母ニ非レトモ父ノ妾ノ我兄弟ヲ生

まゝこゝろひなきゝれといひつゝなん

とくハ和訓栞巻十八ニ疾ヨヨメリハヤク及フノ義也趣モ説文ニ疾也トアリまことゝあてノ哥ヲサマテヨキ哥ニハアラ子ト舩中ノ男女トモトク都ヘカラント思フヲリナレハゲニトヲモヒテ皆人々ワスレストナリげハ和訓栞巻九ニ實字ヲヨメリ顕ノ字音ト云ハイカニ定家卿ノ説ニまことにさりけわト云コトヲげハトイウ也ト見ヘタリむゝし社ハ在國ノ内ウセタリシ女子ヲイヘリ原本ニむゝし行人トアレト誤リ也今ハ定家卿本拾葉本類從本異本等ニ拠テ之ヲ改ムゝハ

シ者ヲ云乳母ハ所生ノ母代リテ乳哺セシ者ナリ己カ實母ヲ合テ九母ニ西土ニハ乳母モ三月ノ服アリ我邦ニハナシ

和名抄ニ鯢ヲアメトヨメリ雨フル時ニ多ク得ル物トイヘリ今あめのうをト呼ヘリ或ハ嘉魚ニト云湖水ニ多シ

まして等トハコノ女ワラハノ哥ヨミシサマナトヲ見テワキテスギニシ女子ヲ思ヒ出ストナリ〻〻ハ續記宣命萬葉集ニミユ母ヲヨミ和名抄ニ阿婦モヨメリ字彙ニ母称曰孃トミユ世の中に等ノ哥ノ意ハスヘテ思ヒト云モノハ何ニヨラスアルモノナレト子ヲ戀ル思ヒニマサル思ヒハナシトナリ子ヲ思フ哥ハ後撰雑ノ一ニ魚輔朝臣ヨメルハ人のおやの心ハやみぬあゝねとゝ子を思ふ道ふまどひぬるゝゝこゝろハ戀ル也戀ハ人情ノ切實ヲイヘハ乞求ルノ義ナルヘシ総テ戀ハ男女ノ間タナレト今ハ親子ノ間タニカヽルといひつゝなんハスキニシ子ヲ戀カナ

シメルコヽロヲフクメテ文ヲ結ヒタルナリ

十二日あをふゝび文時維茂ら冊乃考くれさりしな（鳴）

らしつよ（津）樂むろつよさゝぬ（一定）（なり妙）

考証云ゝあめふらずハ雨のふる也きそふのにてきま

て雨ふらざるをつよあめトハ和訓栞巻二云天水（アマミツ）

ノツヽマリタル詞ハ也萬葉ミ雨ヲ天津水トヨメリ俗ミ

天水トモヨヘリ文時等トハ貫之ノ子ミ時文ト云テア

リ梨壺ノ五人ノ内ナリ今之ヲ文時トカキシヤ審ナラ

ス諸本皆文時トアリ依テ之レヲ改メス又紀氏ノ項ミ

菅三品ヲ文時ト云ヒシコトアリ平ノ維茂ナト侍リシニヤ

古今離別云源のさねゞつく〳〵へゐあ

らんゝてまろりゐ

ゐ時ゐ云々」

ゐあゝハ湯洗也日

本記ニ洗ヲアゐミ

トヨメリ金葉集詞

花集ニ潮ゐあゝナ

トトモミヘタリ今

モ伊勢神宮ノ風俗

シカリヨテ鳴ノ長（ソキ）

明モうしほ汲齋ノ

いもゐトヨメリ

海ヲあまト云ハ日

本紀万葉集ニ見ユ

あをみの轉語ニシ

多クハコノ人ミナランヤ未タ考ヘス此処ハタヽ紀氏同船ノ

人ト解シテ他ミムツカシキ解ヲモトメヌカヨロシ聞書云

ク文時維茂二人ナカラ貫之ノ下司ナルヘシ鳴津ハスナハ

チ大湊ナリ

十三日あつきまいさての（ゴ定）ゆる志だ一ありてやみぬ

男女こゝ（ゐ）ろをゆあゝ（浴）なゞせんとて行ゝりのよろ

しゐ（ゐ）ゐはりてせくゝ海をゝゝれだ

ゐゝゝゝ波とぞうんゆるあまゝゝゞないつきの

ろゝとゝひて志るべくとなん哥よめるさてゐ十

日あゝりなれゞ日ゆもゝろゝふねよのり（たゞめゝ定）（たゞゞゞゝ）

テ蓉海入義ナルヘシ海ハヲあまト云ハ海ヨリ轉シタルナリ

新拾遺秋上　刑部頼浦

ゆくへのそらもとおぼえぬそでのつゆとひとつにそくものなみかな
いづるほのぼの

新後拾遺秋上　よくもち

あぬそぐそらやあくもかをえぬるくらはひてまあ
ぶ秋のあはれ

酉陽雜俎巻十四云妬婦津相傳言有婦人渡此津者皆壞衣

日よあくみたくれなゐこくよさくぬきすそれハ海の神よおぢてといひくく何れあーこのけまことづけてゐやのつまれいぞーあ（イ）ーあハひをぞんゐもあくぬえぎみもあけくくれせるる（定ナシ）

走ざしハ日本紀ニ且ヲヨメリ苟且也今瞬息ノ意ヲ云

ゆあえハ沐浴ナリ真淵云ノ舟よりおりて陸ニのゐりてゆくも也むろ津のあるりは津みて人の家ありてゆあくなとすべてゆとくゆあるりハホトリカタハラ等ト同シよろしゆゆトハ舟ヨリヨリタルトキソノヨロシキ処ヲ云ナルヘシ雲ゐミな等トハ原本いづ

枉綏然後故濟不示風波暴發云々

義楚六帖巻十八引西域記云始黒國有清海周千餘里味苦魚龍交集無敢取者其國行人不得褚衣高声災禍立至行旅咸知云々

河海抄巻六引作手九記云大夫於途中為龍神被取端正美麗之故也云々

龍宮ノ丁ハ博物筌七十二紙云仏説ニ云トロロ信スルニ

れゐ海とゐてゆくゐトアレハ今ハ為家卿本拾葉本類従本等ニヨリテ之レヲ改ムあまハ和訓栞巻三ニ天ヲあまトモ云古事記ニ見ヘタリ哥ハ文ノ如ク解スヘシ

舟みくれなゐこくよさくぬきすずうみの神ホおぢてといひて等トハ海神ハメテスルモノヽヨシナレハ

クレナヒコクウル（紅濃美麗）ハシキヨキ衣ナトハ海神ニオチテキザルナルヘシスヘテ婦人ハ衣裳ヲコノミアカノツキタルヲ嫌フ性質ナレト今ハ海神ヲオソレテカクイウナリ海ノ神トハ和名抄鬼神部云文選海賦云海童ハ即チ海神也日本紀云海神（ワタツウナカミ）和名和太豆美乃加美　源氏須磨云海の中れゐうそ

タラズ竜ハ水ヲ以テ居トス豈彼下ニ家アランヤ浦嶋ハ丹後也秀郷ハ近江也皆竜宮ニイタルト云心得カタシ鎮西八郎爲朝竜宮ニイタルト云ハ琉球ノコト也

古事記ニ云生海神名大綿津見神上田秋成云クヒとづと の神とハ海津持の神てふ意なるを知へし

又和多津美を海の

うゝゝものめてすることのまて云々トアリ太平記巻十八云是ハ如何様龍神ノ財宝ミ目ヲ掛ラレタリト覺ルソ何ヲモ皆海底ニ入ヨトテ弓失太刀刀鎧腹巻ノ類ヲ盡ク投入ケレトモ渦ノ巻ノ尚止ス扨ハ着色アル衣裳ミヤ目ヲ見入タルナラントテ云々此文原本海ノ神ミちずてもゝゝてトアレト今ハ定家卿本拾葉本類從本異本等ミヨリテ之ヲ改ム何のあしらけまことつけて等以下ノ文誤字脱文アリトオボユ解シ難シ契仲モ古今餘材抄ミコノ文ヲ引テスヘテ心得カタシトイヒ又季吟真淵モ同様ミ心得カ

物さる名とするゆ海の神の名より轉れるこ故ゆいと上つ世ゆ海をゆくゝとハいへと神名の外ニ和多津美てふ語ゆへす大津飛名なゝの沙代の比よりやいひ々んくゝなゆハ万葉ニ吳藍ニ書リ紅花ヲ云こ倭名抄ニくれのあゆト見ヘタリのあ友なこ紅花ハモト吳國ヨリ来ル物也今ハ紅ノハナト称

タシト云他日考フルトコロアルベシ聞書云何のあしらけまことづけてとハあしらけハ悪し氣と忘也かいやすめ字なりことづけているを託してとふ心こ一説ゆ芦蔭とらくとも〳〵へりあしらけとつけるハ何のあしけなるゆあゝんと云義こよき衣きぬを大ゆもなきゆよとゝり不やハ穂屋こ芦と蕙なるゝふきこるいやしき家をいふつまハ家のつまこ則ひさしなとのゆをいへりいすじハ飯鮨なりすしあいひハ鮨よしとる蛇也ぎまもあけてゆんせゝるゆハ脛をゝけてゆんするこさて本文の心

セリ

谷川士清云五雜組ニ海鼠一名雲子其狀如男子勢然淡菜之對也と見え余皇日疏ニ文嚙似女陰也みゑ文嚙ハ淡菜なりいがひをいふ又東海婦人の名あり海錯錄ニ誰謂之東海婦人耶當謂西施不潔ゝいへり されハ陰陽の形ニ似るをもて妻とハゝかふれいへるなるべし

ハ湯ニ入ニ女ごもの上る里ハゆゝしき穗屋なれい
そのひさしなどニハい飯鮨鮨蛇やうの塩魚多く
てきゝなけなる故ニ貴之心ニもあらぬと脛を
うけて女どもニ見せてやようニむさき所ニてい
衣のつまとりあけてありくものぞといへる詞へ

秋ニ云クこの一段義分明なゝす何のあゝらげと
ハ芦陰といふへきをふと忘れて何のといひたる詞
をすぐニ書つけうるまやことづけていうこつけ
てとうふすへかやのつまのいずゝとい穗屋の妻の
蝙蝠鮨ニ和名の貝類ニいたゝ蝙蝠和名為其貌似蝙

宣長云肥前國佐伯の海ニおやゝいふ物あり紫色ふて海鼠のこゝくなる形ゝるものゝと佐伯の人々ゝ別り然らぞほやのいぞゝあるハそれを飯鮨ニゝるなるべゝゝある人いへり又云もぎニあげてハ入ニ物をりくゝあゝいゝ見をるを古の語ニもぎニあぐゝいふことのありゝなるべゝ

而大者也うゝべなる芦の穗ニてふける屋のをし
つゝくまあるものどもをいふなり又一説ニ保夜交鮨
とふもの延喜式ニあり長梅干とふものをまゝゝ
いけたる鮨ゝと云々師説ニハいずゝと侍るものを押
て保やのつまをゝと落着せんすいうゝと侍りし然
れとも學者のこの心所ニ見ゝさゝふべゝすしあハびハ
鮨鰒ゝ是も延喜式ニ侍りつゝもあらぬと本意な
ふぬるゝ伊勢物語ニつゝもあゝて絶ころ人とへる
同ゝいゝをぎニあけてとハ脛をあらハるきなげて
磯邊などニおりたちあくさきゝ古今ニいつしらと

まくらをぎにあげて云々此歌をぎてあげて
ハ袴のすそなとくりあけ〜ていこさて此日記のつハ
りのあとしよ礒邊よりきて枯のこりたる芦のう
けなどよ逍遥するようこつけてうの着物なとん
よもあらずをきあらハよのきあけおりてちゆきて
人こまうせてうるとうやさして興なき物なれい
ゐるもあらぬとゝへるなるべし　真淵云ク何のあ
しうけハ或説よなるやうのうけよようんとて
といふ意なるを海邊なれハあらげとつけ云る
君がうけよますうけハなくれといふよ同じ

延喜主計式上曰貽貝保夜交鮎云云
同内膳式云參河國保夜一斛云云
同齋宮式鮎鰒二石云々
同主計式上云鮎鰒貽貝冨那交鮎各四十六斤云云
和名抄亀貝類云老海鼠漢語抄云老海鼠保夜俗用北
又云貽貝尔雅注云貽貝一名黒貝和名伊加比云云
古今俳諧

ゐやい延喜式よ參河國保夜一斛とあるをてあきふう
之穂屋とていなるとともきこえすいずしハ蝙蝠ゐい
あらす和名抄よ貽貝尔雅注云貽貝一名黒貝和名伊加比延
喜式主計式貽貝保夜交鮎と有て蝙蝠なふぬるを云
るゝ　考證三云クあしうけハ季吟の説の如く芦陰なふん
ことづけハかこつけてといもんう如しそもゝこのハよこ
めてゐるべきことをも女のハもてゐるべしをぢめ西あ
こんとて陸よのゐり日記をぢめよりこづらとうくし
て女のけるおもむきをくつまびをを西きて
さてうへきよ海ゐりまれいうこる河の芦蔭よまれバ

蒲原兼補

いつ〳〵とまく〳〵くんを
たぎつあけてあまの
ゞ〳〵をふやまこふん
落久保物語云くり
をたぎあげてきつ
る云々
鰒字典十一畫云房
六切音伏説文海之
魚也後漢伏隆傳諸
闕上言猷鰒魚注似
蛤偏著石慮書云無
魚鱗有殼一而附石
細孔雜々或七或九
蛸同蠱毒虫也蝙蝠
幅齊人呼爲蠟蠟或

まそ法ろこもたゝいふもこそぬバそれよろこつけ
て衣をたぎまでのゞげて水のおとゝめまでおりた
ちてみのかたち人よりやのつまたいぎ〳〵おゝ〳〵あハび
などをえせるなるべし〳〵をそを用さ〳〵ころき
白女のかさもあるべし〳〵ふやのつまたいぎ〳〵眞淵の
説のごとく式に貽貝保夜交鮎とあるこれるべし
つまハ妻の義よあゝび交をいふなるべし〳〵をべて物よ
あをうて交つるをつまるをもいへるゞごとし〳〵をし
ハ貽貝鮎ゝて保夜をつまにしる貽鮎なるべし 又云ク
こは原本と附注本と異本とのこゝまたぎよもとあゝて

謂之仙風
多武峯少將物語云
こゝろ〳〵こよりをゝ
〳〵きさうゞ拍まゝ
いせこゝろそとゝきく
まりおく云々
源氏若菜上云ゆあ
るゞのこゝさうゞ
あゝてうゝハ〳〵ゝふ
ぞなまめゝ〳〵くせ
させゝまへり云々
續令云凡月六齋日
公私皆斷殺生、謂六齋日
八日 十四日 十五日 廿三日
廿九日 三十日
私ニ云ク精進ハ菩

諸ゝふゝたぎゝおものもはゝ字なす〳〵たぎよもとを
るはゝあけてのてすゞをゝぶるべきをゝのてはゝ字を
ふぶる時ゝゝんゝゝゝゝよゝつりてたぎよあげぞ
よゝえせゝるとゝいゝあさなれり〳〵ゝゝるはゝまゝ
ゝりはつゞきゞゝとゝゝゝきれゞもの字ハ衍字おもや
あゝんまゝハすの字にゝゝゝなゝとゝゝてもありめゞ
〳〵巳上四家ノ説取舍ハ著者ノ意ニマカスあはびハ鰒也
はすきハ脛也
十四るあゝゝゝまゝゝるふ也ハおなゞ不ゝとゝまれり
舟ゝゝせちゝゝ節忌殺精進ゝとゝ為ゝさゝうゞ拍なゝれゞゝうゝまゝ時ゝ祭

薩修行ノ六度ノ一ナリ

古今雑上　よろづよふる
つるこのたゆよせくる浪の
あばくもゝまくのわしき
ゆつ〜まりも

源氏物語云
山ゝつのいかりゆゝしけ
るあばくもゝ〜ひこ
なんこふる里人

塩ヨこのぢとるまれきのふつ〜こゝもし鯛ヨ銭なん
れだよ米祿をこのけておち〜れぬうるゑおくあ
りぬかぢとるまて又鯛もてきこゝりよね米酒さけ志だくゑるら
ぢとるまけ〜きあ〜こ〜ぢて

舟君トハ紀氏ノ自ライヘルコトニシテ則チ例ノヨリ人ノゴ
トクイヘルナリ案スルニ荀子ニ君ハ舟也庶人者水也トア
リコレヨリシテ舟君ト云文字出テタル歟「せちゝす
等トハ聞書云々せちゝすてハ〻ふハ十四日ゆて六齋日
なれハ精進潔齋するをいふせちゝ節忌とらく
下の二月八日の段まもせちゝすれハ魚をちひずてあ

り十四日八日いづれも六齋日のうちゝ「さゝう〜ゝもの
トハ精進物ナリ和訓栞巻十一云野菜海草ノ類ヲ精進
物ト云ハ古キ語也朝野群載御齋會加供ノ解文ニ精進
物ト出シ青苔曳于和布曳于海松昆布ナトニヘタリ「醋
食ト云モ精進ノコト也「精進落ハ西土ニイウ開齋也又
開葷トイウ杜詩ニ多年病酒開視滴トアル開ノ字義ニ
同シ「精進ノ語ハモト美犬食セサルヲイヘリ今魚肉ヲ食サルコ
トヽスルハ佛氏ノ意也季吟云々ゝとゝ正月五月九月ハ年
三ヒて持戒精進〜て一切の罪を消滅すべ〜よ〜佛書
ヨ侍り今云ク船中ナレハ萬事不自由ニテサルベキ精進物

口語ニいうハ景色ノ美モアリ
玉燭宝典曰正月十五日作膏粥以祀門戸荊楚歳時記曰正月十五日作豆糜加油膏於其上以祀門戸
拾芥抄世風記云正月十五日亥時煮小豆粥為天狗祭庭中案上則其粥凝時向東方再拝長跪服之終年無疫氣
下文二月九日の条ヨ川のみなくれバ

モナケレハ午ノ時ヨリ後ニ精進ヲ落ラレヌトナリ依テ昨日カチドリノ釣リシ鯛ニアタヘノ銭ナレバ米ヲツカハシテ精進落チセレトナリ「よぬさけ」米ト酒トナリシハ〳〵米ト酒トヲカヂトリニアタヘタレハカチトリ甚タケシキヨシトナリ「去だ〳〵」ハ和訓栞巻十云頻ヲヨメリ新撰字鏡ニ亟マタ屢モ同シトモニ數也トミエ神代紀ニ數萬葉集ニ數々モ訓セリ法華経ニ見エ驟モヨムヘキ所アリ「けゝきハ和訓栞巻九云氣色ノ音也源氏ニけゝきだみトイヘルハざえ色〳〵なる意也伊勢物語ニけゝきヲトルトモ見ヘタリ万葉ニ異情ヲけゝきこ

あざりヨのみぞあさるとあるハ川のあナクシテ舟の縢行スルコトク・エカサルヲ云ヘ

こゝろトヨメリ
十四日なふあづきご豆粥のゆまぞうちをしく
なゝの日ハ粥日ハあし
なまたあざる縢行ぶぞまぞれふれりあまりをぬふ
いゝづゝヨヲをおられむ人ニ汝をなぞあつぞある
そ諸本ぬ北ゝいのゝ文歟
そそぐいとちあるまバまるあるふく風と海とた
おのふどちあやあるゝんいふのひなきをゝいくる
おもゝいと資ナシあつらハゝ
「あづきのゆゝ事ハ延喜主水司式云正月十五日供御種粥料米一斗五升粟黍子薭子菫子胡麻子小豆各五

外塩罔云〻「公事根源ノ卽粥ヲ献スル條ニ云々寛
平毛ヨリ年毎ニ之レヲ奉スルトアリ 今日ハ正月十五日ナ
レト船中ニシテ物ゴト不自由ナレバ小豆粥ヲモニヌガクチ
ヲシトナリ くちをしノ〻ニ意ヲ含メテトメルナリ
「くちをし」ハ和訓栞巻八云朽惜ノ義ナルベシ口惜ト
カクハアラシトナリ 「日のあ〻」トハ風波又ハ雨ナトノ
アルヲ云「あざるハ以呂波字類抄ニ膝行ニ訓シテ井
サルトアリ則チ舟ノ水浅キ処ニテ動カサルヲ云ナリ」昔
あまりトハ去年十二月廿日ニ門出シテ今ハ正月十五日
ナレハ前後廿日アマリナリカクイタツラニ船出シテ日

「名ハシボムノ義草
水霜ニアウテ凋零
スルヲモテ名ルナ
ルヘシ又シボムノ義
肅殺ノ氣ヲモテイ
ヘリ古今集ニけさ
はしもれきえんか
さゝをちふさりつト
アル哥ハちゝノて
みハヲ霜ニ用ヒタ
ルモノ〻
新撰字鏡ニ壇ヲク
モリテキリタツト

ヲ送リタレハ人々ウミウカレテ海ノ面テナトヲウチナ
カムルヲ云 風ハたちあゝる等ノ哥ハイタツラニ日ヲ送
クルニウミシカレテ吹ク風ト波トハ思フドチナラント云
「とゞハ萬葉ニ共ノ字ヲヨメリ友どちおとふとちナ
ト是レ也
十六日風なをやまねゞ狂おれゞ所ユとまりたゞ
海の面波なくゝていつしかきといふをそゝんと
のをなんおもふ（実に）（為）
ある人ゝこの波をそゝんとて

ヨノリ
公任マ集云あらつ
きづくよはいやし
まより出こまふと
て写のあるこゝろて
ほのいふぬさきは
うゝひとつとのこ
まひとれバ云く
狭衣物語二下云あ
うつきづく水のき
やうなるはかゝぎ
ぬのいとうきはは
まげきといふゝめ
をきて云く
きをハ竿橋棹ノ字
ナトヨメリ釣竿丹

みたゆきぞありけるさてあるのゝ日よりを
ふまでは北日あまりあるよなおしてなつ
こさきトハ真淵云ク御崎なる安藝郡室津の崎なり
今考ルニ室戸ノ岬ナラシカ　霜ゝゝも等トハ南海ニハ
霜タニモオカストキケト波ノ中ニハ雪ノフルヨウニ見ル
トナリ波の白キヨ雪ニナシテヨメリ拾遺戀草等ニ
云ノ霜おうぬこそ打のみのうしのもまひさしひさ
しくなりぬ秋のあゝきく　廿日あまり五日よ
なりよけりトハ十二月廿日ヨリ霄月十六日マテ廿五日
こ何トナレハ十二月ハ必月ナレハナリカク日ヨカンヘミル

棹ノ類也小尾ノ美
ナルヘシ和名抄ニ
榜ヲヨミ童蒙頌韻
ニ擢ヲさをさすト
ヨメリ
万葉四云久堅乃雨
毛落糖又云ク久堅
乃吹夜雨尓巻八云
久方乃月夜乎清見
巻七云久堅之夜度
月巻十三云久堅之
王都乎置而古今云
久かゝのひゝりの
とけき春の日云々

ハスヘテ風波ニサヘラレテイタツラニ日ヲ送ルニウミ
ツカレタルサマヨアラハシレタルナリ
十七日ふとれる雪ハ水ナシのめてあるのつきぬくよ
いわ扶おもしろれだゝをゝしてをゝ扶ゝくゝ扶
あひぐまのうへもなゝ海乃そこもはれドでくよな
んなのなりるうゝだもむう扶をのこゝさ棹ハうゝ穿
ぐつ波のうへ扶月をゝふ舩ハおそふうゝ海のゝ山乃そゝ天
をとゝひゝんを聞去妙群にきゝるかゝまさある
人のよあゝふ妄群
なゝのそこの扶月のうへまこぐふ扶乃さをゝ

ひさくゝハ天ノ枕詞ニ空トモ日トモ月トモ星トモ雲トモ雨トモツヽケタリ或ハ都トモツヽケヨメルハ天都ノ意ナルヘシ鏡トモツヽケリ天鏡ノ美ナルヘシ又タヽヒサカタトノミイヒテ空ノ事月ノ事トシタル哥モ見ヘタリ久カタノヒカリノトケキ春の日トモ云万葉ノ久方久堅トアルハ天先成ト

さゝるをのうらなるべし定なるうらし扶摩こもとゆゑてある人のまてと扶ナシ

よめる

うげろ花ハ波のそこれるひさうさのそらこぎてこゝろそれぞわびしきのくゝ附ふあひごろ花ゆう

やくたのけ月くゝかぢりとりらくろきくもふハうゝいで

きぬ風もふきぬたしーふきもうえしてん附といひて

うゝ舟々る定扶君羊このあひざゝまるゆり思いとゝびー

くもるハ和訓栞巻八ニ云霊異記ニ鬱ヲヨミ常ニ曇ヲヨメリ雲ヲ用フニイウナリ萬葉ニ雲入トモ書リあ

うつきづくよハ暁月夜ナリ萬葉十ニ四具礼零暁

云ニヨリテ久方ト云ニヤ

月夜紐不解ツキヨヒモトカテ戀君トアリ くもものうゝ名ハ雲上ナリ

うみのそこハ海底此文ハ水天共ニ琉璃ナリト云意也

さをハうゝ等トハ原本文字ニテ棹穿波上月舟襲

海中天トアリ今ハ諸本ニヨリテ假名ニ改ム むらしの

をのこトハ漢土ノ賈嶋ヲサスナルヘシ例ノオボソカシテ

名ヲハカニテムカシノヨノコトイヘリ漁隱叢話前集巻

十九引ニ今是堂手録云高麗使過海右詩云水鳥浮還

没山雲断復連時賈嶋詐為梢人聯下句云棹穿

波底月舡壓水中天麗使嘉歎久之自此不復言詩

今云ク原本ニアルトコロト少シ違ヒアリ其所覧ノ本又異

古今秋上　たぐ〳〵も
久〳〵ぢ月のうつるもあ
きえなかをもちそれ
ぶやてりまさるらん
惠心三昧美云須弥
山南面有閻浮樹月
過樹影入月中或云
云月中蟾桂地影也
空処水影也
後宋慈雲式公月桂
詩席ニ天正丁卯八
月十五夜月有濃華
雲無纖迹天降靈實
諺若曰此月中桂子
奴事者播種林下一
種即活ト見ヘタリ

アルカ　きゝさしにきけるなどトハ原本扨トモきゝざ
れよきけるトアリテ李吟真淵種々ノ説アレトモ今ハ
為家卿本附注等ニヨリテ之レヲ改ムコノきゝさし
にき等トアルハ是レハ前云如ク全文スヘテ女ニナリ
テカヽレシハカク漢土ノ故事ナトイヘルハホコリカラナ
ルユヘニワザトホコリカナラシトテコハキヽサシタ
ルセトコロワレル意ナリさをハ棹也ひさゝ〳〵トハ
そトノ枕詞ナリ冠辞考ハ云ク古事記ニ比佐
迦多能阿米能迦具夜麻」仁德紀ニ比佐箇多
能阿梅箇儺麽多」万葉ニ久堅之天河原ニ」

此事我邦ニモ文安
元年宝永乙酉ノ年
明和辛卯ノ年ニモ
アリテ乙酉辛卯ノ
年ハおりけまゐり
ノ時ニ當レリ
秋くれとほのかつふの
ミやハなるひろりをも
とちぶすもろりを

巻五ニ比佐迦多能阿麻遅波等保斯」こハ先ひ
とのふことをいひて後よつり意ハいたんそハ
万葉み此とだを久堅能」久堅乃なと書しと
神代紀ニ清妙之合搏易重濁之凝場難故天
先成而地後定とあるをおしひ合せて天のゝ〳〵
まり成たるハ地より既ニ久しけれハ久く堅き之
天とふといひ又天の成しハ右のてくなれハ地よ
りも久しき方てふ意ともいへ共真淵今思ふ上
へ代ことだの下ニ之とふは必體の語ニ有とそ
用の語ニふをなゝ然れも堅きとハ用乃語なれ

だ久しく堅き之といふ語ハ有へからす堅きをかたくとしても猶同し
又久しき方のてふハ之の辞ハいふへけれと方てふ
語のいひさま古への人の言こし聞す且凡の語を神
代の事にしとつきて意得るハ常なるら古への語
のしとつき様ハこやびらみしやすらゝ也右の二つハ意
つゝなくしておしくれ〳〵りよく古意古語を思ん
てやくりなくおしひよれるものなる〳〵されハ
年月ゐおしひて漸おしろき事あ案そハ先ジ
久堅久方とし玉例の借字とすこなそこ等ト水
ミウツレル月ノウヘヨリサヲサセハ棹ニ藻ナトノサハリ

唐詩云桂子月中落
又育拏方滿正中秋
李時珍曰吳剛伐月
桂之説起于隋唐小
説月桂落子之説起
于武后之時
日本記ニ閑曠万葉
ニ無用ヲイタツラ
トヨメリ古哥ニ
人とかく生れける身の
うれしさをいとふゐ
なす我こそ〻邪
身ノイタツラナト
哥ニヨメルハ死又
ル事ヲイヘリ空シ
クノ意之

シハ月中ノ桂ナラントイヘリ月中ノ桂トハ詞林采
葉抄云月中ノ桂長二百五十丈月輪内有之下有
河此木秋花開酉陽雜俎云月中有桂有蟾蜍
くろきくもトハ黒雲也原本きノ字ヲ脱ス今諸
本ニヨリテ之レヲ補フ〻ふねかしハこふ称ハ御
船ナリ真淵云ク舟かるハ室津へふねのゝりとしなり
十八日なゝ所ハあり海ゆゝ〻ゆまで舟つゞ
さずこのとまりとほくこれとしちすく又見ぬそも
ひとおもしろしかくれとしなとけれハ為所ハなふごとも
おぶえず男ごちたんやりまあんゝゝうゝな

万葉廿
於保吉美能美許等
可之古美伊蘇尓布
理宇乃波良和多流
知々波々乎於伎豆
恵慶集
いそふりのさゝぐ浪ごま
たりのまこゝろのこゝろ
えりふりとまぐじ
契中云相模風土記
云鎌倉郡見越崎毎
有速浪崩石國人名
号伊曽布利謂振石
也
鷺字書云於耕反又
云於京反黄鸝俗作
鬻非漢語抄云春鳥
和名字久比須

どふ殿ー舟ゝいでさて いそづゝなるこゞばある人の
よめる
磯鰂抄
いそぶりのよするいそゝうハいとーつきをいつとゝハ
ゝぬ雪のこゝぞゝ多るこのうきいつねせぬ人のこ
ゝろなり
海あらけるハ海ノ荒レルナリくるしけるトハ舟酔
ナトヲセシナルヘシこゝろヤリトハ真淵云ク思ひを
やりうしなふをいふ万葉ニ思ひをやるといふ
これより遣悶といふゝこれ也いたづらトハ和訓
集巻三云徒ノ字ヲヨメリ痛クツラシノ義ナルヘシ

いそぶり等ハ真淵云クいそぶりハ波のいそゝふる
るをもてやかていそぶりといひて波の事とする也
哥の意ハ磯ミラルゝ波ノヨスルハ磯ニハ時ヲモワカヌ
雪ノフレリトナリ波ヲ雪ニミナシテヨメリ扨テコノ
哥ハ常ニ哥ナトヨマヌ人ノ哥ナリト也
まゝひとりよ見る
風ふきよる波のいそゝうぐひすれ春ゝえた
らぬ花のこゝぞさくこゝろとゝをそこーよ
ろーとゆすてゝみのをさーりるおそ那月日ごろのこゝろ
くろーきんやりよめる

たつなくしをもきさらの花うやこぶくこうぜ(左定)よもて
人をとのるべくなるこのうゝどゝを人のなるようと
ふをある人(宝ナシ)はまたきゝて(宝ナシ)ふけ(眺)ぬまてよあり(宝扶)その
ゑうめ秋ゝあてしそもゝあるものなゝもゝ人ゝ
なえあゝぐゝらふやうなり妻の明いとゝ
しきあゝくゝ(えゝ定)ものゝ(発)ますます秋とゝもえまぬばぞう
けゑとゝえゝよみ(まえ定)あへゝゝこのゝ(ゝゝ定)ゝゝゝゝにいひ
ゝしまゝてのちゝ(そのちゝいゝゝあゝゝ人為扶)れいゝ秋ゝん
風ゝよる茅ノ哥ハシラ浪ヲ花ニミナシテヨメリ
うくひすハ鳥ノ名ナリふねのをすゝれるお

季吟云季の文字あ
まりもるゝ節奏の
なゝひゝてうちゝ
なふるゝ口ゝたま
りてあゝくきこゆ
ゆるハきゝふゝふゝえ
久字あまりてもゝ
ゝひやうゝあゝゝ
ゝぬやうゝよゝ付
るゝゝゝや歌林良材
二条院澄波ゝこつ
うゝのおきつゝゝ
あひゝゝゝづくあま
のいきもつきあへ

きなトハ考証ニ義アリ一ハ船中ノ主君トイウコヽ
ロニテ紀氏自ラヲイウニハタヽ船長ヲ云今ハ前義
ヲ親シトスたつなゝ茅トハ真淵云クたゝるハたゞ
めるといふ也人を欺くをいへりけゝめの二首のうち一
首ハ波を雪ゝよせいま一首ハ波を花ゝ見ゝて
よめるを引合ハせてこゝゝゝあゝよめる也よせつハコ
トヨスルヲ波ノヨスルミカケテイヘリなゝゝトハ何(ナニ)ヤ
カヤト云コトゝふけゝてハ耽ルナリ真淵云ふける
といふハふゝきよりいてゝる詞也夜のふける楽ゝ
みふけるなゝといふこゝもその哥ゝをゝもゝ

ぞおもをてそおもへ
とよめるハ何ごと
ゐ一字づゝあまり
ハれともわくひや
やうしゐきゐ百ゐ
世六字ありてミゑ
ゑゑゑゑゑ代り又系
物黄門の未来記ハ
ゐもれぬふんうふ
めゝとゐひおもふ
ゑてもまつべきは
あゝぞとゑんとゐ
いもぶくいふ方行
りくれゐ世六字行
るをゐクふぬ仲の
中ゐクきつふ物ぬ

をきてゐれもふかく思ひのてよありといふニヤ
トアリミそゝド あゆより 等トハスヘテ哥ハ世一字ニ
テもしアマリト云サヘモカキリアルヲ世七字ナレハ人
皆コタヘス笑ウナリ 反あゝでトハ季吟云クえゞ
たハあゝてなりうのうさのあしく文字あまり
すきゝるをゝゝへるなろへし哥ぬいとけあ
しき等トハ是レハ已ノカ哥ヲ人ノ笑ヘハ腹立シテ
ワラヒガホモセヌナリコノ文原本ニハけしきあしく
てえすトアレト脱文ナレハ今為家卿本ト附注
本ニヨリテ反ますト改ムまねべとゐえまねバす

へるゐいそんやサ
七字ゐや
ムカシ 昔ヲヨメリ
神代記ニ嘗ヲヨミ
古語拾遺ニ久代ト
モ書リ向ヒシノ義
ニ向字ヲサキニト
モヨメル意過ニシ。
カタヲ云ニ昔在、在
昔皆同シ
カみハ明兄ノ義神
明照臨マシマスヨ
リ云ヘリ

トハタトヒコノ哥ヲマ子テヨムトモヨミウベクモアラス
トナリタトヒ又カキタリトモ人ニハヨミエジトナリ 其
哥ヲキヽタル今サヘイヒカタキニモシ爰ニシサハ後
ニハイカナラントテコヽニハシルサズトナリ
十九日日あゝれきだふねいぐさだ
廿日きのふ孫やうなきバ舟もいぐさすみれ人こうれ
へなゞくくるゝくこゝろもとあゝれだたてはのへ
ぬるこのぞをゐふゝくゝ昔ニ三十日とこのぞふまバ
おゆびゐそこなそれぬべしいとこびよるハいもねぎ心とこぶ一為夜そゝゐ
待ずれ日の昔の月いでゐれり山ゐれゐなく

安倍ノ朝臣ハ姓氏
録ニ孝元天皇ノ太
子大彦命ノ後ナリ
トアリ仲丸ノ父祖
ハ古傳ニ中務大輔
船守ノ子トアレト
續記ニ見ヘ子ハ信
シカタシ靈亀二年
八月多治比真人縣
守等遣唐使ノ時十
六歳ニテ留學生ト
シテ唐ニツカハサ
レシニカノ國ノ書
籍詩等ニモ見ヘタ
リサテ皇國ニカヘ
リシトイヒ又明州

この月ここ元あるほみえよむとそよめりける
うく
古今異版 あまのはらふりさけみれかすかなる
あまのはしのもの集
ここのしまもりいでし月のもとそよめりける
十九日ノ処ニ日あしトアルハ悪日ヲ云ニアラスタヽ風
波ノ爲ニサヘラレテ日ノアシキヲ云也廿日ノ処ニて
ろもとなみれバトハコヽロモトナシト云コトニシテ伊
勢物語ニアリ元とは八方葉ミ ヘタリ心ニ由縁ナ
キ義ニヤ元とはすナト同シトイヘリいくり廿日
三十日等ハ文ノ如ク解スヘシ今ヒカスヘシコトヲツ

ノ海ニテ溺死セシト云モ誤ニコハ其時唐ニテ溺死タリシト聞ヘシニヤ李白カ詩ニ明月不歸沉碧海ト云句アリソラヲオモウテ溺死トイヘルニ天平勝宝四年藤原清河ノ朝臣帰國ノ時ニモナヘリケンヲ明州ノ海ニテ風ニアヒテ又カシコヘフキトボサレテ後紀ニ絹ヲタマヒ續日本後記ニ正二位ヲ

ヨクイハントテおよひもそこなハるべしトイヘリ夜

ハいも祢すトハ舟路ノ旅ミ苦ミヨルモ子ムラサルラ云

山のたもとなくトハ海上ノケシキヲ云阿倍仲麿ハ元正帝ノ時ノ人ナリ倭字麿ヲ麿ニ作ルハ日本紀ニ出テ後ノ史傳多ク麿ミツクルサレト日本紀ニカケル例ナク又タタク麻呂ノ字ラ用ヒタレト傳寫ノ誤リナルヘシ今の國人うまのたもあむけ云々かゝうたつくるトハ唐詩選五言徘律ニ送秘書晁監還日本トアル詩ナルヘシその月ハ海より等トハソノ時ノ月モコヨヒノ如ク海上ヨリイテタルトナリ神代より

贈ラルヘコト見ヘタリ仲丸又ノ名ハ朝衡トイヘリ

万葉七

春日在三笠乃山二月船出遊士之飲酒杯尓陰尓所見管

同十

春日在三笠乃山尓月母出奴可母佐紀山尓開有櫻之花乃可見

唐詩選巻四云

送秘書晁監還日本　王維

積水不可レ才安知滄

神もよゝこひ等トハすさ氏の命ノやくもたつノ御哥等ヲサスあをうなハゝ等トハ真淵云々古今ふハあまのたゝとゝてのせゝれゝり天の原青海原ふたやゝみいひつゝしあるゝ海上なれハ今ハ青海原のうたをゝられゝとおろのふあさけのふりハ辞さけハ見さけ聞さけなゝふ同ゝくもるゝ意也今云クふりさけゝれハさけハ遠クアラキミル也春日ハカスム日ノ義ニテ萬葉ニハルノ日ノカスカトツゝケタリ宣長玉緒四巻ニカモノ添タル詞ニテタヾカト云意也

海東九州何処遠萬里若乘空向國惟看日帰忙但信風驚身映天黒魚眼射波紅鄉國扶桑外主人孤嶋中別離方異域音信若爲通

メテルハ愛スルヒ

又解云ク三笠山ハ惣名春日山ナリ又云ク春日なる三笠の山トハ春日ト云ハヒロキ地名ニテ大名三笠山ハソノ中ニアル地名ニテ小名也出し月かしトハ出タ月カトウタカブ意也仲丸イマタモロコシニワタラス奈良ノ京ニヲリシ比イツモ見ナレシ三笠山カラ出タ月ト一ツモノカトナリ此ノ哥ヲ遠鏡第九三首ノ意ヲ解シテ曰ク今カウ空ラツトハルカニ見渡セハアレ〳〵海ノウヘヘ月ガテタアミアノ月ハ故郷ノ三笠山ヘ出タ月テアラウカイマアトアリ委クハ古今餘材抄續万葉論等ニ就テ見ルヘシサテ此哥ヲコヽニ載ルニ古哥ナ

真淵云男文字女文字ヲ古ヘ別なし〳〵このごろいまやうのなぐさみなる玉ほのありしを女もしとハ俗ヨいへりとアるさて仲麿ハこの哥を漢文ヨミて乃せりる方ヨよく通ぜしりといふのミ通ずのいろるにあらぬ

後拾遺羇旅宇佐の使ふてつくし〳〵へまうりける芝ヨなをまろ〳〵いふりを

レハ文中ニカキツケヘキ例ナルヲ諸本皆外ノ哥ノ並ニカキタリ又前後ノ書ブリモ文中ニ古哥ヲカキ入レタル体ナラ子ハモトノマヽニテヲクナリ下ノ二月九日ノ処ニ業平朝臣ノ哥ヲカキ入レタルニモ既ニ文中ニカキツケタリ是レハ前後ノ文モ古哥ヲ文中ニカキイル、体ナレハナリ

この外國の人さて云るすぐくおぼえ（う定 も定 け為）れどことのゝを（も定）をもこゝ元ドにさらまもるまこいぶ〳〵てこのことだつ〳〵へあるる人よいひ云〳〵せられだこてろをやうこえ〳〵りえいとおもひのほのにるんめでくるもろこ〳〵とおの國

橘為義朝臣

くやこふて山のたにたに
ほりあつめるこゝろよびハ信の
うへなるこそまて

とゝこゝ(こゝに定イ)ゆ(ゆうれとイ)ゆとなるこゝの心をゞ月ハこゞけハおぼじ
ことなるへゝをゞバ人のんもおなゞことみやあらんさこそ(さてまこそイ)
今うそのうみを思ひやりてあらんのよろこ
(後選編旋)おもふて山のたにたに(るゆうけのイ)なれど波よりあいでく
なりけふてそいれ(いるうなイ)

をとこゝルじトハ李吟云クなををんあもゞとふ
ふ對ーてまなを男文字とゝ也こゝバをつこる
トハ今頃云譯官也昔シハ通事ト云ヒろこートハ
漢土ラ云今ノ支那也この國トハ吾日本也云スルカ
ラトヤマトハ言語チカヘトモ月ノカケノ同シキカ如ク

人ノ心モ同シコトナレハコトノホカコリ哥ラ感ストイヘ
リ人心モトアルモノ字原本ニハをトアレト今ハ諸本
ニヨリテ之レラ改ムそのうみを思ひやりてトハ考証ニ
ニ義アリ一ハ仲麿カモロコシニテ月ヲミテあをうな
原ノ哥ヲヨミシ時ノコトヲ思ヒ出スナリ二ニハ都ニテ
月ナトミシトキノナト思ヒ出スナリ其証ハ都みて山
のえみみしトイヘリ取舍ハ省者ノ意ニマカス都みて
山のたみたし其ノ哥ハ文ノコトク解スヘシ真淵云
都みて山のたみたゝとゝふ所三笠の山ゐいでゝ月
うしとゝふみあうり波よりいてゝ波みこそいれこい

たかろげハ朦朧氣ノ美ナルヘシ神宮ノ書ニ多ク少縁トヨメリ少縁ノ字ハ法華経ニ出タリ白文集ニハ無明ヲ訓セリ源氏ニハたかろけなトてハトアリ

和泉式部日記云いつかハとのこまハせゝらハおかろけなるふこまへていしゝかバ云々

拾遺愚三　もゝ人ぐさ

あふるハゝこれなのふハ青海原ふりさけ見ればハトいふより出たり

世百年花時むすまよふ年でもそゝなる人ゝの舟いづこれを尺れ花で喜ぶ春ハ秋のこのえゝ九ちれるやうあぞありみる出かろけ花ハかひすりくみやあちんぶもふぐよきこロいできてこぎゆくこのなのひぐよつるをれんとゝつきてくるゝとゝハありそれがうゝふうゝ（ふかうゝ定附）

秋こそ物のこゝろあゝるれゝぐ父母あり（なゝ為附）りゝ思バろゝとゝふぞあり色あり

このくゝふをきゝてこぎくるにくろとり出ゝよ

くもりこれおかろけ

まやゝのこひしき

源氏若菜上云おかろけはしめゝるヨうゝりゝあさくもゝむなきこれぞ云々

十六夜日記云ゝろゝ州おきにくろきゝりのむれゝくるハ船ゝいふゝりなりゝゝ云々

苻堅ハ敗レシ時ニ聞風声鶴唳皆以爲晉軍之至トイヒ李愬ハ吳元濟ヲ襲フ時ニ鵝鴨池ヲ撃テ

（いもの定）多いもの（ゝへよあつまりゝゝ）ゝ（いもの定）ゝ

よ流ゝろくうちよゝろこのぎゝろゝのいゝゆゝうくゝゝ（くろき定）

れこゝとにゝろき流をよきこぞいふこのおとば何

とゝ（はなれと為附）なゝれとこゝのいふやうゝぞきこゝゝる

人の程よあハもバこのむゝれかくいひつゝゆく

よゝ君なる人流をんゝくよゝ船ゝ見てゝ

いぞくむくいせんといふなるゝをゝふこゝよ海ゝ（かゝ為）

まゝゝゝそゝゝゝまゝバのゝゝゝルみれゝゝらけぬなく（ゝ為）

そぞゝやゝそぞゝそ海よあるこゝ法なる船ゝり（八十）

ゝゝぐかゝゝゝゝゝゆきゝこいそゝべのゝゝぶゝゝゝゝゝいづゝゝ未（さ為）

軍声ヲ乱ルトイヘリ

十訓抄下云彩光左大臣ハ小一条院の女御あ〜そびよりて御堂関白を恨なりて悪霊と成て一族の内ゑこと〜く白髪になりこまぴりんこそいとおそろ〜ろれ云々

漢書第五十四蘇武傳云武留匈奴凡十九年始以驅出及還須髪盡白云々

南齊書第三十六謝超宗傳云武帝收謝超宗付廷尉獄一宿髪白云云

世説巧藝篇云韋仲将能書魏明帝超殿欲安楠使中将登梯題之既下頭髪皓然

因敷兒孫勿復学書

埤雅巻一引養生經云魚勞則尾赤人労則髪白

さゝ舟のおそつ〜まとつかぢとりいへ（原本妙群）

卯の時ハ朝ヲ云也みな人々の舟いすハ紀氏ノ〜リシ舟ノミナラス外ノ舟モ皆出テユクナリ春の海ゐ秋のこの文等トハコノ淡トヨリ人々ノ舟ノ出テユクサマハアタカモ落葉ノ水ニウカビタルカコトシトナリこのえしゝノぴノ字ハ季吟ハ助詞トイヘリおゞろげハ真淵大ゝたこいふ詞也トイウ猶こその哥ハ文ノ如シろへらやハ前ニ出タリこゝろこそふあハきなる等コノと。文字ヲ原本脱ス今諸本ニヨリテ之ヲ加ウくろとりハ和名抄羽族部云鴉漢語抄云久ろ止里黒色水鳥也日本紀ニ黒

鳥トアリ但馬ニテハなつてうトヨブ治兼ノ頃平家ノ大將水鳥ノ羽音ニ驚キテ逃落タリシ由云ハ此鳥ナリトイヘリ和名抄巻八出成盛衰記ニハ小児ドモノヨム百詠ト云小文ニ鴨アツマリテ動スレハ雷トナルト云アリト引証セリ東鑑ニ海ノ黒鳥又海鴨ト云ト見ヘタリ又秋鶏ノ小形ナルヲモ云ヘリ志ろき浪をよすとぞいふ等原本よするとそいふトアレト今ハ拾葉本類従本等ニヨリテ之レヲ刪ル物いふやうよそきこえたる等トハ考証ニモノ、心ロシリテ興アルコトヲ云ヨウナリトホメタルナリトアリ人のろとふあハね

ハとゞむる也等是レハイヤシキカチトリナトカ身ニシ
テイヘルコトバニアラ子ハカクハトカムルナリとゝむハ和
訓桑巻十八云谷ノ字尤ノ字ナトヲヨメリ科ヨリ出
タリ尤ハ怪也ト注スル意也神代紀ニ温ヲヨメルハ義
訓也古事記ニ登賀米受ト見ヘタリ此処ハモノヲアヤシ
メルコヽロヲ含ム舟君ハ紀氏自ラ云波をアてトハ真
淵云ク波をアてハ下ヨ海のまだおそろけれハとい
ふへくけてアへしトアリくいそくハ海賊也むくいトハ
アダヲ報スル也是レハ紀氏任國ノアヒタ海賊ナド擒メ
トリシコトアリシカ今テコノ海路ニテアダヲ報センドテ

追ヒ来ルナトキヽテヲソル、サマヲカクナリソレノミナラス
海上ノヲソロシサミテイタク苦勞シタレハカシラモ白髪
ニナリヒハ十年ノ老ノ一時ニ吾身ニキタリショウニオモウ
トナリ依テなゝそぢやそぢハ海ニアルモノトイヘリスヘ
テ人イタク労スレハ白髪ニナルコトハ唐詩選五言絶句ニ
白髪三千丈由愁若個長トアル意ヲ含ムわゞかみノ
哥ハ文ノ如シ季吟云クいづれまされりとハいづれゝまさ
れりゝんと含ゝるてみをえせサテカチトリモイヘトカ
ヂトリヘモトヒカケテ哥ヨリ文ヘツヽケタルナリ原本お
きつ島守トうぢつこりいりトアレト今ハ定家卿本

おきつ〜まハ沖津嶋ニ渡ニ見ヘワタル嶋山ニサス續千載ニ

風渡る山わの小海玄
晴て後ろ仕清〜おき
つ〜まやは

まゐ〜ハ日本記ニ順ノ字依ノ字尋ノノ字万葉ニ隨ノ字隨意任意ナトヨノリマヽニノ美ニ唐詩ニ庭草无入隨意ニ縁トアリ足引ノ山ノまゐ〜ハ間ニ〜ヲカサ子タルナルヘシ

古事記云阿志比紀能夜麻陀袁豆久理顕宗紀云聊日木此傍山

万葉二云足日木乃山之四付ニ

菅家ノ哥ニ

足曳のこなたかなたに道はあれど郷へいざゆいふ人のなき

日てりてハ日照ルナリ

拾葉本異本等ニヨリテ之レヲ改ムおきつしまものトハ海の沖ニアル嶋ノ番人ト云コトニシテ紀氏ノ自ライヘルナリ

廿二日夜べのとまりうんているをことゝゆゑをおひてゆくてゝる定ナシ

くふ山ゑ面ようひゝこゝのつぞろまなるものゝ〜ゑとゝよ

りハをさかくぞあるこのゝ〜ハあをこくまるゐ定考

山ルゆくとゐんゆるをゑくあゆ〜をこゝとゝ〜をそ

よめるそのゝ〜為ナシ

こぞゝゆく舟ホ定れバあ〜びをのゆきこゝ面く

をゝそし〜ぶやとぞいるをゝこなをきゝゝ〜ハあ

事為ナシゝそふつゝ〜ゝふ波あ〜けゝ殘にゆきあ

下ノ二十七

ゐれなをの花さけ里面ゐ人社まめる

波とのゝ〜ひとへふさけどいろゝをゆゝとゝなる

とにまゝのひめるこのゐ

夜ヘハ俗ニヨンベナリことさまりハ外ノ泊リナリをの

ゝ〜ハ、男ノワラハナリ以呂波字類抄ニ童ニラノ

ワラベト訓ス前こめのゝ〜ハトアルニ對シテをのわう

ハト云ヘリ原本をさなくぞノぞラ脱ス今諸本ニヨリ

テ之レヲ補ウ舟をこくまゐ〜山ゝゐゝトアルハ唐ノ

曹松詩ニ掬水疑山動揚帆覺岸行トアル意ヲ含

ムあやゝきことゝ〜をそよめるトハ真淵云クあ

や〜きとみて句をきるへし漢文の例物語なと
ま多し九歳ちりなるてらハのそのとゝろ
よりハをさなきこうまものゝ哥をよゝへる
ハあやしくるゝなと詞をあやまいへるなりこきて
ゐく舟のうちみて等トハコキテユク舟ノ内ニテ見
レハ山ノユクヨウニミユルヲ山ノ上ニ立テル松ハ山ノユク
ラハシラサルヤト云哥ノ意也足曳トハ山ノ枕詞ナリ
スヘテ枕詞ハ下ノ詞ヘイヒカヽルマテノ一ニノ哥ノ意ニ
カヽワラス冠辞考ノ一ニ集中ニ此冠詞イト多ク字
モサマ〜ニ書タレト皆借字ニテ山冠ラセシ意ノ異

和名抄微賤類云檝師文選呉都賦云擣工檝師和名加知止利
クヰヒトハ貝原神祇訓ニ神トハ人物ノ上ニアリテ崇ムベシ是神ノ正訓也鏡ノ中畧ト云説ハ用ユヘカラス鏡ノハシマリシ前ヨリステニ神ノ名アリ神トハタウトムヘケレハ神ト云ナリ
ホトウハホトヲリケト云テ暖氣ノ訓ナリ昔シ守屋ノ大ナルコトナシコハイトオモヒ定メカ子テサマ〜ノ意ヲ云也此冠詞ハコトニ上ツ代ヨリイヒ傳ヘコシモノナレハ大カタニテ心得ヘクモアラス足ヲ引ノナド用ノ語ヨリ之ノ辞ヲ云ハ上ツ代ニハナシ然レハ此アシヒキノキハ必体ノ語ニシテ木テフ事ナラン神代紀ニ軻遇突智ノ命ヲ五キダニ斬タマヘハ足ハシギ山ズミトナリヌトイヘリ此シキハ借字ニテ繁木山テフ意也然レハアシヒキノシヒキハ繁木ノ謂也サテ山ハサマ〜アレト木ノ繁キヲメヅレハ凡テ山ノ冠詞トハセシナラム万葉巻二ニ青香具山者云々

臣佛像モテ浪花ノ
堀江ヘナケ入レシ
ソノ時仏像ニ暖氣
アリシヨリホトヲ
ソケト云ソレヲ今
ホトケト畧シタル
ナリ親鸞善光寺和
讃ニ出ル
古事記云更取國之
大奴佐而奴佐二字以音
書紀允恭紀云玉田
宿禰則畏有事以馬
一疋授吾襲為礼幣
云云
日本紀纂疏云幣謂
束帛也謂布帛紙之

コレラニヨルトキハ青繁木ノ山ヲフ意ナルヲアヲノヲヽ
畧シキミヤ」已上一義古事記傳三十九ニ足引ノヒハ清音
也山ノ枕詞ニテ是ニ始テ見エテ後イト多シ足引
城之ナリ是ハ山ノ脚引ハ長ク引延タルヲ云城トハ凡
テ一構ナル地ヲ云テ即チ山ノ平ラナル処ヲ云其ハ周リ
ニ限アリテ自ラ一トカマヘナレハナリ引城ヲヒキト云ハ
同シノ重ナル言ハ一ツ省キテモ云例ニテ旅人ヲタヒトヽ
云例タヽシサレハ此秘詞ハ足ヲ引タル城ノ山ト云ツヽキナ
リソモヽ此足引昔ヨリ種々ノ説アレトモ皆アタラス」
已上一義なみあゝけトハ考証ニ守鏡集以呂波字類抄

類也
管子國蓄篇云以珠
玉為上幣以黄金為
中幣以刀布為下幣
万葉三
佐保過而寧樂乃手
祭尓置幣者妹乎目
不離相染跡衣
真淵云万葉ヨ紀ハ
つるつゝまのるこ
りるこ中にぬさと
りむけてもやりへ
りこゝるともいへり
いつくふてもたむ
けいをるこ
宣長云ぬさハ神ヨ

ナトニ散ノ字ヲアラクト訓セルヨリ思ヘハ波ナトノ散
ルヲあゝけト云ヒシナラント云ヘリ又云ク海あらけノ
け文字ニゴルヘカラス海アラケ礒ニユキフリ波ノ花サ
ケリト詞ヲカサ子テカキタルモ一ツノ文勢ナリトアリ波
とのみノ哥ハ波トノミタヽ一様ニキヽツレト色ヲ見レハ桜
ヨヤ花ニマカウトナリ他ハ文ノ如シ
廿三日てのゝくゝ梨ぬこのるこゝ歯絨おそのあ李
といへゝこのるこほしとけをいのふ
廿四日こゝのふおれしこゝろなる
廿五日かぢとるこゝ花きこゝこのぎあゝ心こいへゝ舟りこゝ

を向るおをもいひ
又拔まいぎをおを
もいふ名義ハ禊布
佐ふて事をこひね
ぐていふそふ〜
こねをふをつゞむ
ヨバぬとなるなり
祓乃ぬさもその罪
穢をのぞき清めさ
まへとねくさもて
出をなれバ祓ふを
りて祈くとんバへ
一つなりきて布佐
ハ麻なり頭昭云ち
ぶりの神とハ道ふ
りの神といふなや

海賊出ひくとふこと出来て尽きぬ(イ附)ぬ

廿三日ノ怒ここのヨ〜うのトアルハ何レノ怒ナルヤ審ナラス

海賊ノ恐レアレハ神佛ヲイノルトナリ廿五日ノ怒こうぢとを

ハ穢師(セツシ)ナリきこのゼハ北風也おひくハ追来ル也たへずハ不

絶ナリ

廿六日まことあやあんこういぞくおよといへど夜(ヨナカ)ぞだの

りよ(定ナシ)ヨ(イ)をいぎ〜てこぎろるなたむ(ゆ)ゆ

ふありのぞとをしてぬきをハまく〜をぬきぬきの

ゑんぐ〜ちまバクちとうはまう(イ定為て)たんぐまうることだ

このぬさをぬちろ〜にこ(もやうにこふあひすこやうにこじめをろす

下ノ二十

海賊ふもよめり
ヨ〜つミの云々

たむけのかみ倭名
抄二道神ヲヨメリ
唐韻二禍道上發一
天道神也トミエ又
朝野群載ニ出京関
間奉幣道神ト見ヘ
三代實録ニ越中國
玉手向神トモ見ヘ
タリ夫木集ニ
名居〜つれ坂山の
さゝらいなるを向の神

へとゆ〜ふのたいまろる(定ナシ)これをきてあるヨらえ乃(めのヨ〜ハ為)よ

ゑ〜ふ

新千載羇旅
ヨ〜ふ〜ふ〜ちひるのゝ集六帖
六帖四

ひのぜやまにふりなんとそよめる

夜半ぞクヨトアルヲ類従本ニハ夜なクト仮名モテカ

キ拾葉木ニハ夜中トアリたむけトハ陸ニテモ舟ニテモ道

ノ神ミツ〜カナランヨウミトイノルヲ云ナリたむけハ万葉

ニ祈ノ字手祭ナトアリぬさハ真淵云古ヘハその色々の

絹布を尺なら奉ヨ(丸)ものゆ万葉なとゆハ常ヨ(丸)

旅ゆ丸おくぬきとよあり後ゆハ旅ゆハこまゝに切たる

ゐあらないさめそ
稲彦云クたうけハ
手向ノ畧ス万葉三
長屋王ノ哥ニ佐保
過て奈良の手向ゐ
置ぬさハ等注ニ奈
良坂ノウヘニ旅ノ
手向スル所アリテ
ヤカテリ手向
山トイウナラシ
今峠トイヘルモコ
レス菅家コヽニテ
ヨミタマヒシナル
ヘシ幣ハ絹布ニテ
枝ニモツクレト又
物ニスエテモ奉レ

を袋ゐいまてゝゐあるをさゝ〳〵き所々ゐうちちゝし
てゝもけてゐくせとぐつこのちふりの神等トハスサ
ノオヒ風ハ今チブリノカミミ奉ルスサノヒンカシヘチレハ京
ノカタヘカヘラシニハラヒ風ナレハカクイヘリちふりのうみハ
道鱗ノ神也和訓集巻十五三云ノ顕昭説ニ道ブリノ神
ト云ヤ又隠岐國ニ知夫利ノ島トイフ処ミワタスノ宮トテ
ラワス紙出ニハ幣奉リ祈ルトソ式ニ由良比女命神社元
名和多須神ト見エ宮記ニ須勢利姫トス出雲神門郡
ミ那賣佐ノ社ニ坐ス和加須西利比賣ノ社アリ日本後記ニ
隠岐國智夫郡比奈麻治比賣ノ神常有ニ霊験ト見ヘシハ

ハ置ト云ヘリ今ノ
京トナリテコマカ
ニ切テ打チラスヱ
レヲキリ又サトモ
立又サトモイヘリ
古ヘハコマカニハ
キラヌモノト見ヘ
タリ又云クぬさハ
古ヘハ絹ノ五色ノ
コマカキ切ヲぬさ
袋ニイレテ打コス
タウケニテ山ノ神
ニマキチラシソナ
ヘテコスナリ紀貫之
カ家集ニあいたり
たる人のねへゐく

所謂火焼権現也コハ別処トス隠岐國帳ニ正四位上和太酒
名神トナセル是レナリ貫之カ哥ニ
ちくもよふねうんとれ玉ぐのちふふりれ神をいの
れとそおもふ
真洞云道反の神道守の神なとありこれハ道鱗の神
なるへし行道のうとりの神といふ心也こゝハ海路みか
わていつるなり
このあひだ（かゝる技イ定）の技群こみのぜよろこれをうぢとりいてくわこりてこみ
にわのけ（あ為）などよろこぶそのおとをうてゝ〳〵ハ九女（おきな）
もいつゝうとゝ〳〵四ツ（なだ）ゐやあゝいくよろこぶこれ

にぬさやるとて
もみち葉も花ともも
れるゐをハまゐの山の
神そちるふん

中にあハぢのくるめといふ人乃よめるうゝ。おひこうぜの
淡路 言妙
ふきぬるゝ時そゆくゑみねの乃でうちてゐそうまし乃り
とそていけのことよつけつゝいめる
（よさそのこゝろうけていへる等）（も定）（て定）（いろイ附）

まこるハ斧ヲヨメリ又伐モ同シ秀乃起ノ義ニヤ物こほこ
りトモ見ヘタリ古今ニほこてしきトヨメルモらしノ反
リナリ字書ニ自賢曰斧ト見ヘタリ新撰字鏡ニ誇ヲイ
ヒほこるトヨメリおとをきくハ帆ヲアクル音ヲキクも
後ノ哥ミホデウチトアルヘカケルナリ弓〳〵ハし女もトアル
女ハモトヨンナモトアリシヲ心ナク女ト文字ニ公且シテカ
キシナルヘシ此冬ハワラハニムカヘテイヘルナレハヲンナニテ姫

ヲヨメリ姫ハ老女ノ事也サテコノヲンナハ淡路ノタウトメト
アルト同人ナルヘシ下ノ文ニ淡路ノ巨子トアルト同人ナルヘ
シおひうせノ哥ハ文ノ如シストでハ季吟ハ物ヲヨロコブトキ
手鼓ナドウツコトヲ舩ノ帆手ヲウツミソヘテイヘリ又真
淵ハ帆ノヨコ手ニ縄ヲタクツケテ右ヘ左ヘヒラカントスル綱
ヲ乃てトイヘリ物ヲヨロコブ時ハ手ツヽミナトウツヲ舟ノ
帆手ヲ風ニウタスルニソヘテヨメルナリ又谷川士清ハほ
で舩ニイウハ舩手ナリ荷鋪トモ云又考証ハ物ヲヨコブ
時手ナトウチテヨロコブヲ乃でウツトイヒシナラン
サテソレニ舩ノ帆ヲカケテイヘルニテユク舟ノ帆ト帆ノ字

和訓栞巻廿八云太神宮ノ御饌ニソナヘ奉ル稲ヲ作ル田所ノ御田直ノ果ニ田長ノ入舞謡ヒ鼓吹シ送リモテ行ヲ誇ルトイウナリ

おいかぜハ追風之又順風之かセ反け氣ノ美ナルヘシ又生スノ美之物風ヲ得テ生化スヨテ虱ノ字出ニ从ヘリ神代記ニモ朝霧ヲ吹撥ノ氣風神トナルト云ヘリ

一字ニノミカヽリテ手マテヘハカヽラサル詞ナルヘシ評メ曰ク諸說皆臆說ニ出テヽ取ルニ足ラス今案スルニ予ハモト筑前志摩ノ郡辺ノ産ナルカアル日事アリケレハ舟シテ岐志ノ湊トヨリ延崎トイヘルトコロマテ至リシ時今日追風ナレハ帆手ウツテメテタシト云ヨテソノ故ラ問ヘハ帆手ハ帆ノ下ニ大縄ノイクツモサガリタルモノニシテ追風ノフクトキハソノ木ニガ風ニウタレクサモイサマシケニ舟走リユクナリ今コノ哥ニ石てうちてトアルハコノコトナルヘシ然シ帆手ウツト云ハ國々ニテイサヽカ言バノチカヒモアルヘケレトモワカ故郷ナル志摩郡ノ舟人ナドハ大概石で

カシコシハ賢之カシマシノ美之

万葉ニ名草むト書ルハ美訓セシ也なくきもるトモアリるノ反むヽなくさとのミモヨメリ歌ノ詞物語類ニモなくさめト見ヘテなくさみトイヘル例ナシトイヘリ祇ヲヨメルハ倭ノ俗字也要ハ要ノ俗字也晉書巻六明帝紀云明帝數歳元帝抱置膝前屬長安使来因

うつト云ヘリてけ等トハ天氣ヨカレカシト祈ルナリ

廿七日このぜふきなくあらくもバあいごさぶこれ

このこくなげくなく男たちの「ハなくさめ」定ナシうゝ

うゝるヨをのぞめバ都とろ〻あどゝふなるてす

ぢきまをさゝてある女のよゝんゝうゝ扶ナシ

日をぞるもあまぐもちゝく見るものを都へや

おもふそ所そるけさ又あゝ人乃よめふ

あくこのぜのゝこゝぬのぞゝのしたちくれだ波訓ハ

いとでもるけゝうりゝわ日百舟やまぶつまハどき

定ナシてねぬ

問汝謂日与長安孰遠對曰長安近不聞人従日邊来居然可知也元帝異之明日宴群僚又問之對曰日近元帝失色曰何乃異問者之言對曰擧目則見日不見長安由是益奇之
俗ニ蟋蟀ヲイトヾトヨメリ
維摩経云度百千劫猶如弾指太平記音義巻十一云爪弾ツマハジキ
守津保藤原君云い

かしこくハ古事記ニ恐ヲヨミ書紀万葉ニ可畏懼トアリ考証ニモトハヲソル意ナレトコヽハイタクナド云処ニモチヒタリト云
なぐさむハ神代紀ニ慰ヲヨメリ平善ノ意令和ノ意也物思ヒヲマサラカシテ慰労スルヲイヘリ万葉ニ意遣ノ字ヲヨメリ
日をたぬえノ哥ハ漢土ノ晋ノ明帝ノ故事ニ似タリ晋書云ノ挙目則見日不見長安トアリ
いとこハ萬葉ニ彌字ヲヨメリトイヘト是レハイヨヽヽトヨムヘシ
いとこノ語万葉ニハナシ今云クいととハいとくノ略ナルヘシ伊勢物語ニいとこくトモヨメリ文選ニ専ヲヨメリ
つまえしきハモノヲウトマシク

ちめうちつゝひてつまえどきをしてきこゆ云々
蜻蛉日記云いとわしこしとてつまえどきうちしてものもいえで云々
源氏空蝉云わたれ人のかをつまえどきをしつゝうふゝゝまふ云々
日本紀纂疏上云凡陰陽家丑日除手甲寅日除足甲為吉又云寅日三尸於兩手指甲午日三戸於両足是

思フ時ノワサナリ

廿八日よもすがらあめやまずけさも(も定)

廿九日ふねいだしてゆく(ヨ日イ)うらうらとてりてこぎゆく

つめ(の定)のいとながくなりにたる(なるを定)を見て日をかぞふれば

けふは子の日なり(なれぞ定)ければきらずむつきなれば京の

子の日のこと(をあるびイ)いひいでゝ小松もがな(定ナシ)といへど海なかなる

れはかたしかしある(定ナシ)女のかきていだせる(しゝるイ)うた

(六帖一)おぼつかなけふは子の日かあまならばうみまつ

をだにひかまし(しぞひくべかりける 六帖)ものをとぞいへる海にて子の日のうた

にてはいかゞあらん

當去而足指甲云々
道生八歳守甲法云
甲寅日可割指甲甲
午日可割脚甲
菅家文章云嘗聞于
故老曰上陽子日野
遊屢老
董一肋問荅云歳首
折松枝男七女以
爲羹飲之
漢語抄海松和名美
流
續古今集賀
惠慶法師
うこぎなさ岩ゆるね
ぎくうゑ松のちとせを
これになそのすそ〳〵ん
夫木廿五 よゝ人ち〳〵
なゝこの〳〵はちゝに
なづさふうゑ松もゝき
ばの沼そゝ〳〵ハこえゝる

ゝもすゞ〳〵ハ廿七日ノ夜ライヒけゝこハ廿八日ノアサヲ
云ナリう〳〵〳〵ノ上ミ日ノ字ヲ置テ見ルヘシうら〳〵と
てれるトハ万葉十九ミ宇良ミ宇良ミ照流春日介ト
アリ此時モハヤ正月ノ末ツコロナレハ春ノ日モウラ〳〵
テリテノトカナル意ヲ含ムつめいとなゝく云々さ〳〵す
等トハスヘテ瓜ヲキルニハ日ヲトリテキルヨシ古書ミ出
テタリ乃チケウハ子ノ日ニテ瓜ヲキル日ミアラサレハキ
ラサルナリ瓜ヲキル日トハ簾中抄云つめきる日手の
瓜丑寅足の瓜寅手トアリ子の日ノコトハ拾芥抄ニ引
十節記云正月子日登岳何耶傳云正月十日登岳遠

望西方得陰陽静氣除煩悩之術也トアリ和訓栞巻廿二云
正月初子ノ日野辺ニ出テ小松ヲ引テ祝トス子ノ日ヲ根延
ミヨセテ根コメミスルナルヘシ小松モ又子松ノ義ニ取ナルヘシサテ
子ノ日ハ當月五日初子ミテ十七日モ中ノ子ナル ソレニ何ノ事
モナク今廿九日ノヲト子ミナリテ松モ若菜モト哥ヲヨマレシハ
イカナル譯ソト云ヘハ五日ハ風モヤマス人モ多クトヒキテソレラニ
マキレタルヘシ又十七日ハくゝれるくもゝなくノ哥アレハ子ノ日
ノコトハナシスベテ舩中ナレハソレラノコトニハアツカラスタヽ都
ヘ今日ハカヘルカ明日ハカヘルカトソレノミ案シ煩ヒタルナルヘシ
シカルニハカラスモ瓜ノヒタルヲ見ルニツケ突然子ノ日

真淵云今日まて日ごとに引あり風ふきてさゝぬ日もまれのあれ共ふかぬこゝろづかぎりにはふうくとてれバんものどやうになりて瓜のもくなりさゝるまんづきしるさゝもあるべしむかしの子の日は聖徳太子出くの小松引若菜つむといふすハなし今の都となりてまゝ引なるべし今の世の説なつまの子

ノコトヲ思ヒ出シ人ニ日始メテ松モ若菜モヨマレシナルヘシ小松ムラナトアレト海上ナレハ小松ヲウルコトカタシトナリお

ろつなハ覺束ナシナリなノ字ハ若菜ヲ含ムこゝろハ

崔禹錫カ食経ニ水松也狀如松而無葉トアリサテ今日

八子ノ日ナレハ小松モナケレハイトオボツカナシセメテ海士ナ

ラハ松ト云名アレハ海松ヲタミヒカマシモノヲトナリあまハ

海人也海ヨリ轉シタル也蜑戸竜戸ナト云是也日本紀ミ

泉郎ヲヨメルハ泉ハモト地名郎ハ漁郎ノコトシ崑

崙倫ノ類ニテ水ニヨリ沉ムヨシ代醉篇ニ見ヘタリいろハ

あんトハアシカラシト云ヒタル詞ナリ

下ノ三十六

れ日ハ日ををさてむかの初子のの日ハふこるべしといへ里方ハ少く国ををくるさあ俗云ふハさもあるべし雅言ふハさもあるべし雅言ふいそぐ初子の日をふごるべきるしなし子の日といふときハいづれ子の日ふても音便ふてふごるしなり又正月七日を子の日ときめくなる菜つミ小松引こゝハ

まゝこあるべ人宝

ある人のよ名をるうゝ

ゆなれどるる菜もつまぢこのまゞ雅乃ゆゑごこぎとて

るうゝなれだこのくいひつこきゆくはもしろき

所ふ角をこゝあせてこゝやいづことひろきを仕侍れと

まゝとそいひるむてのゝとさといひるる而にを

みけるの為女こゝのまゝまゝ里々のそれぐ以ひけゝ

くむこのゝ志だこのりし而の名たぐひふぞあなる

あいまといひてよめるうゝ

とゝごろををみゝ而社名ゆゝ抜ハバさよる波

をもあいまとそで乃ふ為とそいる妙為群

坂のごとく見る後
撰集正月初子の日
ゆ松引日〳〵日ゆ
うなをつむるを
日本釈名蛋ハ海士
トモカク。アハアヲ
ウミナリマハスマ
ヰノ畧也アヲ海ニ
スマヰスルモノヽ
又マハムト通スア
ヲ海ニスムヽ魚ト
ルアマヽ海辺ノ山
ノ木ヲキリテウル
アマアリカツキノ
海士アリ以上三ノ
アマナリカラノ書

ゝふなき」と等ノ哥ヲヨム三春日野ニ浦ノアルヨウニキコ
ユレハサニアラス詞ハヲウチカヘシテ今テワカコキワタル浦ニ
春日野ノナケレハ今テ日子ノ日ナレハワカナモツマストキク
ヘシわゝなトハ前ニ云ヒシカト今テ又云ハン古今ノ打聞ニ
ニ正月七日ノコトノヽ思フハ後ノ頑ナリス(カタクナ)ヘテ春ノ内ノ雑
菜ヲ若菜トニ云也春日野ハ大和國春日山ノフモトヲニ云若
菜ノ名所ニヨメリ土佐のゝ国ハ阿波ノ國ニ在リ撫養(ムヤ)ト
相對スむゝし土佐といひける所よみ〳〵る女トハ紀
氏自ラ云ナルヘシとしごろノ哥ハ文ノ如シ名ふしおゝで
トアルヲ原本ニハ名みしおゝくトアリ今ハ定家卿本為

二モ出タリ
南海記云挺蠻以舟
為室蜒有三一為無
蛋善拳綱蚕編二為
蠔蛋善没海取螺三
為木蛋善伐材木
夫木廿六 よみ人しらず
たゝうなる子の日ゝさ
きにすむあまハうゝ
ゝ松をのゝひきやるすゝん
榮花物語云
おぼつゝうなゐおい子の
日を山すげのひきこゞぶ
へてもいのりつゝる事
春日野ハ大和國添
上郡春日社ノ大鳥

家卿本拾葉本類從等ニヨリテ之レヲ改ム名みしおゝ
ハトハ名ニツヒニアル通リナラハト云ナリ彦麻呂山ブミ
ニ名ニ賀者(オハバ)ニテ逢トイフ名ヲ貧持(オヒモツ)ホトナラハト云
意ナリ
世日ああのせふ(イ)ぶ海賊ゝ夜ありきせざなつまと
て夜なのぞりにみをいぐして伊波のこと(水門)をとてゝる
夜あのなきバみゝ元んのゝもゝえぶをこと女
のゝゝく神ほとゝぎをいのりてこのみと(水門)をとてゝり
ぬとゝゝうの時なをの上に奴爲(ヌレマ)といふ所をゝて四せ川(イナセ)
といふ所をとてゝろこのゝゝくいそぐて和泉社(ゝゝく定)雑とい

居ヨリ東ヲ云神代ノ昔シ天照太神邪神ヲ征討ケ正心ニカヘルエ人万民モヤスクナルヲモテ太神ノ御コヽロ清浄ト和平マシマスコト春ノ日ノ長閑ナル御コヽ地ニテ春日ト御歡ヒ玉ヒソノ里ヲ春日ケラレトソ

古今　忠岑

春日のゝ雪ゐを分て生出る草のもつゝみへ〳〵見ゆる

ゆゆしい〳〵りぬ〳〵ふ海まぢ仏くる物なゝ神仏のめぐみ恤ふ仰ぎ（アハレフ）ありぬ〳〵ふ海まのりし日よりこのぞふまぢ（くゝかれる定）

三十日あま季子九日なりに〳〵をいまたいづこのくゝきぬきぢ海俄ものなゝぶ

夜あるきトハ夜中歩行（アルク）ヲ云ナリ夜なゝハ夜半ナリ

阿波のゝとハ阿波ノ鳴門ナリゝゝ神佛をいのる等トハ季吟ノ説ニ辛労ノコヽロナリトアリ今云ヒカラクハカヒくしクノ意ナルヘシ奴嶋ハ淡路ノ國ニアリ季吟云淡路ノ海中ニ在リ太平記ニハ武嶋トアリ土佐泊ヨリコレマテ五里也トアリ日本地誌提要六十巻ニ沼嶋又武嶋ト名

拾遺　忠房

巻の作つるなへに春日はしるふのゝ宮を花ゝこそみを

ク淡路國三原郡油谷村ノ南苗町ニ在リト云田無川ハ季吟ハ和泉の田川よやト少シク疑ヒヲ合テ注セリ和泉名所圖繪巻四谷川（クニカハ）湊（ミナト）ノ処ニ此日記ノ文ヲ引キ云クとらうの時ぞうりにぬるゝ所をすゝてたなゝハといふところ伏ゝてゝるトアリコノ説ニヨレハ季吟ト同ク和泉ノ谷川ナルヘシ然ルニ日記ノ文ヲ熟覽スルニ奴島ヲスキ田無河ヲコヘカラクイソキテ和泉灘ニイタルト云テ區別セシ処ヲ考レハ田無河ハ和泉ノ國ノ地ニハアラサルヘシ何レ淡路ノ國ノ島々ノ地名ナランカ又考ルニ紀州由良ノ湊ノ沖ナトノ地名ナランカコノコトハ他日考フトコロアルヘシ和泉灘ハ

季吟云土佐泊ハ阿波國ニ鳴門ニちゝ
〳〵又云ときゝいひ
りるホヨもミりる
女云々これハ紀氏
土佐の任國のヨを
あゝハいまゞ発
端ホもある人あが
きの四とせゐとせ
と書て土佐といえ
さり〳〵ハバこゝホ
もうくむゝ〳〵など
とおゆめゝ〳〵てゝ
けるえ
真淵云ク土佐の泊
といふハ阿波国ヨ
泉州日根郡ノ沖ヲ云ナルヘシ考証ニ和泉なゞハ和泉
國和泉郡和泉郷ノ灘ナルヘシトアレト和泉郡ハオホカ
タ山郡ニシテ海峡ワスカナリ是レハ誤ナルヘシ神佛のめく
み等トハ既ニ上ニ神佛ニイノルコトニ箇処イタス今其
々ヲ結ヒテ祈リシ効ノアリシコトヲ述ヘタルモノナリ恤
ハアハレムトヨムヘシ原本ニウレウト仮名ヲツケシハ誤
リ也三十日あまり九日等トハ上ヨリタビく日ヲ筭ヘテ
海路労レタル意ヲ表シタルモノナリ今ハ和泉ノ國
ニ来レハ海賊ノ恐レモハヤナキコトヲノヘテ女心ノツヨクナ
リタルコトヲ表シタルモノナリ

ありゝある人いへ
りきてむゝ〳〵土佐
といひけるをなる住
りる女といふを土
佐國土佐郡土佐郷
る住〳〵女のこゝろ和
に立てよめるなる
べし〳〵考之のこゝ住國
のちなるをおぞめ
くゆうにおしといい
ふハりなハぞ
地誌提要六十一云
鳴門ハ板野郡ヨリ
土佐泊浦孫崎ヨリ
鈴石ノ磯ニ至ル南
北長二里十一町（分）
餘

二月朔日朝のまあめふるをうまれ（のあたの忍定）時ぞうまるやゝぬれ
ぬ和泉の灘（しゝハ為）といふ所をすぎゆく海のうへ
紀のあれごとくに（為ナシ）風浪見えぬ思緒ハ松原を
見てゆくとこゝろのゆくまゝに松のいろをあをく
いそ乃浦ハ重ねごとくり（諸本ナシ）白く貝の色をまぜハう
りて（まぶんみゆゝ為扶ナシ）又色よいまひとといろぞ〳〵ぬこれあひごゝろん
ふ思たこの浦といふとこゝろよ楽つなぎ（幸紋）もきて
ゆくこのくゆくあひぐるひる人乃よ見るこうこ（イナシ）
むゝてげたこ乃浦なみたてぬ日たうゝ〳〵ゝこの
かゝゝと考ゝ見ゝ見ざゝん

島ヨリ淡路三原郡福良浦門崎ノ間相距ル東西十五町小鳴門ハ同郡北泊浦ヨリ堂ノ浦ニ至ル長一里五町北泊浦普光寺前岬ト向山ノ間相距ル一町又堂ノ浦ト小嶋田村ノ間ニ相距ル二町

万葉十五
年可之欲里伊比祁流許許等乃可良久示能可良久毛已許尓和可礼須留可聞

古今雑上
よミ人しらず

黒崎ハ和泉國日根郡淡輪村ニ在リ此嵜ノ南ヲ深日ノ浦ト名ケテ此邊絶景ナリ名所圖繪巻四云濱松ノ色濃ニ芦辺ニハ田鶴ノ聲波間ニハ千鳥鳴ツレテ滿チニユラレ江水洋々トシテ西ノ方ニハ淡路ノ翠巒高ク聳ヘ北ハ摩耶六甲山武庫ノ谷ノ嶺列ナリ南ハ紀ノ國加田ノ湊粟島ノ神祠近ク其西ニハ子嶋阿波鳴門ノ海アラクシテ空ハ滄浪ニツヽキテ漁舟トコロ〳〵ニチヒサノ渚ハ真砂淨フシテ洗フカ如ク櫻貝春風ニウチ上テ残月端山ニ白ク秋ノ汀ニハ葦ノ花赤ク巨巖コヽカシコニ立チテ物スゴク其名ヲ藻ヲ苅ル海

おゝてるやなふかのミつはやく〳〵わのく〳〵もまれハおいまのくるなな

地誌提要云沼島周回二里六町三十八間東西凡ソ十八町南北凡廿四町戸数七百五十七戸人口三千六百八十九人トナリ

ナタ洋ヲ云仙陽説ニ波高ノ戔トアリサレト神代記ニ云名門ノ轉セルナルヘシ灘ノ字ヲヨム

ハ〇アシヽ廣田ノ歌

士乙女ニ問ヘハ冠石鳥帽子岩入道ナト、教ユソモ〳〵此浦ハ昔シヨリ和哥ノ名トコロニシテ古人秀詠多ク代々ノ集ニモ見ヘタリ此処ノ文五色ヨイワントテ四色マテイヘリ黒崎松の色あを〳〵浪の色ハ雪のごとく白ク貝の色ハすゝ〳〵トアツテ黄ノ一色ナキナリ也この浦ハ箱作ノ浦ユハユル日根郡貝掛村ノ南ニ在リ西ノ方ハ皆海濱ナリ名所圖繪ニ又ノ名ヲ箱ノ浦トモイヘリつなでハ和名抄ニ舟具也牽紋音支訓豆奈天挽船縄トアリ多まくしけトハ冠字考五三云ク万葉ノ八ニ玉匣華木乃河乎云々こハくしけを開クといゝけ

合ニ詠うし
天津やそあハなごゝあの
ごきゆくさきゝあり
けるそのを

地誌提要六云黒崎
ハ岬角ニシテ沙洲
ヨリ出スル処ナリ
ト云

和名抄 漆色具云蘇
枋須方 入用漆色也
山家集
あふそむるすすうの

たり或人開るを略きてあの一語ゆゝれりといへるハ
今少し思はさりゝをかるつけの例二様あり一ッハ
巻十一ヨ小簾之寸鶏吉尓入通来根とよめるハ簾
の透ゆきよりこのよへといふを中みけの一語を添て延た
る也巻一ヨ情佐麻弥之とよめるハ心淋しなるゆま
の語をくわへてりとゝ句今も開てふ語の中ヨ志の
一語を添ての〈たる類と意得へき也又の様ハいひう
けの語ヨハ上のひと語すらさごうなれハ次下の語ハ
音を通ハして凶ろヨ轉し下す也巻十二ヨ垂水之水
能早敷ハ師てふハ水の早きといふをてしきの語ふて

こうひいろあるていろ
のをまとやいかゆやある
ん

能因法師ノ哥枕云
重之
ゆくこの浦ゆゆくれあそ
ふ芦田鶴の千とせのう
けそとゝもゆゆ見ゆ
タマハ珠玉ヲ云海
ニ出ルヲ珠トシ山
ニ出ルヲ玉トス
金髦鮮ニハ自然ノ
物ヲ玉トシ造作ニ
出ルヲ珠ト云ヘリ

わかそせてり早きをそ(ハ餘りふことゝトハず侍らむ)今テ此類
まて開をあゝきてふ語よておもせてりとしすへしきて
玉匣ハ巻四ヨ珠箋有玉櫛乃とよ見るごとく櫛をいゝ
たこ也且けとハ惣てうつた物をいへりサテコノ玉くしけを
こトツくクルコト萬葉ニナシト考証ニイへり人麿集ニあ
ゝゝのさゝゝヨあらんたまくしげをこねは山のあけんあゝ
にトアリ契仲師コノ哥ヲ評シテ延喜天暦ノ後ノ作者ノシ
ワサナルへシト云へリ今云ク玉箋ノクシケハ真名ニスレハ箋
ト云字ナリ又上三箱ノ浦ト云アリソレヨリシテたまくゝけ
たこトカケタルモノナルへキヤヨクく考ウへシ哥意文如

シ鏡ト云モノハ櫛笥ニイル、モノナレハ玉くしけもこの浦浪
トイウヨリ海ヲカヽミト云ヒシモノナリ且ツ海ヲ鏡トミル
ハ風波ナクシテノトカナルヲ云ナリ
まくふな君(為)れいてくこの月まそかりぬることゝうなな
けきそくるきに名ぬずして人もいふことてゝ如至
にいくるうこ(定ナシ)
かくふねのつなで(定)ぬのきまの日をよそくいの(四十日五)
まそ(十日)れハなをなを梁さく人乃忘へるやうなぞたゞこ
ゝなるとゝそ(為)そうにいゝ(拾)へゝふな君のゝくゝそね
りいくゝて(出)ふと思へるるをえゝもこそ誣(ハヽハヾ為)へとてさゝ(しゝ定つゝ諸本)

櫛ハ髪ニ用ルモノ
ユヘニ名トス哥ニ
別レノ櫛柘ノ小櫛
筑紫櫛剃櫛ナトヨ
メリ五節ニ名リ櫛
まき櫛かゝ櫛ゝゝ
櫛こゝしナト見ヘ
タリ類聚雜要ニ鮮
櫛延喜式ニ槙櫛ノ
櫛アリ
古事記ニ五十日帶
日子王トイヒ又万
葉ニ筏ヲ五十日太
トカク皆五十ヲいの
の假名ニ用ユ、

めゝくやみぬみそのに風なみ名のゝすそとて(志の一)
まりぬ
舟君ハ前ニ出ツルなくふねノ哥ノ中ナルよそくハ四十日也
いくハ五十日也たてことトハコトハヲモカサラスアリノマヽ
ニイヘルヲ云也古今ノ序ニたくこと哥トアルト同シひそ
くにいゝ(しトアルヲ原本ニひそくゐいひしトアリ今諸
本ニヨリテ之ヲ改ムひねりいゝすトハ詩ニ拾出ナト云カ
コトシヨウくトシテヨミイタスヲ云ゝひヘトハ真淵云ゝ去
ひヘハ去ひめ也元去ひてハいもしとなりさゝめくハ呼言
也

二日ノ風やまで日ひとを為夜ゝこゝろとけをいのる
三日海ぬしうゝきのふのやうなれバふねいさゝぜの為ナし
くことやすねぞきゝの海ゝちこのゝるこれまつけてよめ
も定
るうゝこ
徒をよ柔てゝひなきものハねぢつもるなゝごの
ゐをぬらぬなりゐるこゝてゝふくれぬもいろまのゝもを杉武為附
二日ノ処ハ文ノコトク解スヘシ三日ノ処ニキシノ浪タチ
カヘルコレニツケテモトハ昔シ業平朝臣ノウラヤマシク
モカヘル浪カナトイヘルヨ心ニ思ヒテ浪ノカヘルヨ見テ我
モトヽク都ヘカヘリタク思ヘトモ風波ニサヘテレテ涙コボル

万葉七
向峯ニ立有桃樹成哉等人曽耳言為汝情勤
源氏若菜上云あや
〜くうちにのゝまハをるゆさゝめき
ことゞものおのづゝ〜ひろこりて云
々
伊勢物語云そこに
ありけるゝゝゐおき
ゐていゝ〜きのあ
ゝまえひありきて
云々
大和物語あ〜ふな
ゝり緒をよりてノ哥ハ文ノ如シ
四日のぢとをゝふの風のけしきくものさゝを為附
いひてあいゝ為さびなりぬゝゝゝどゝ陸日に波風
ゝ〜ゝこのかぢとをハ日をこゝもゝゝハぬイ
ゝをゝふ舟とまりのもゝまゝゝゝぐのゝゝハ〜き貝
いゝなどおゝゝをこゝれバ海ぐむゝしの人をのゝこ
ひつゝゐなる人ゝよある
六帖三
よすゝ波ゝうちむよせなんヨゞこゝゐゝ人ヨをを
貝おりてゝゝゝハんといへきだあゝ人の歌ゝ〜く
舟ゝんやりによゝる

ひなるをとこのう
ちみのやうなるを
うこなるこの車の
まへよりいきうり
云〻

和名抄微賤類云乞
兒揚氏漢語抄云乞
索兒保賀比々止今
按乞索兒郎乞兒也
和名加多井

ヨモそれ貝ヨモろひ〜もせず志〜ヨをこゐるをゞまも
かとゝゆゝ抑ハんとなんいへるイ
コノ処ハス〈テカヂトリト云モノハヨク天氣ヲ見定ルモノナ
ルニカクヨキ天氣ニ舟ダサヌヨハラタテ思ヒテカチトリ
ヲ罵リうゞとゐトイ〈ルナリ〜こゐトハ眞淵云ク伊勢物
語ニうゝこゐおさ形といひ大和物語ニうゝこゐのやうなる
と侍るハそれヨ乞兒の事ゐて人をいひ下しあるハのる
こと八也今俗ニ癩病ノモノヲカツタイト云蓋シコレラニ
基キシモノナル〈シ　このとまりのもま等トハコノ濱ニテ
イロ〳〵ノ貝ナト多シトナリス〈テ貝石ナトハコトモノ

更級日記ニ大津ノ浦トアリ田楽法師三人古ヘヨリ太津ニアリ毎歳春日住吉ノ祭禮ニ出テ伎藝ヲツトムトアリ

古今　忠房

君をおもひおきつの濱なく田鶴の〜うゐく丸をそゐ〜こゐ

新古今　定家

おと〜へよおもひおきつの濱ちどりなく〜出〜あ〜のほうけ

モテアソフモノニシテ今ノ俗ニコトモ小石ヲナケテ之レヲタノシムイシナコト云　コノ貝
石ヲ見ルニツケテモ土佐ニテウセニシ子ヲ思ヒ出ストナリ
コノ哥ノ意ハワカ憑ル人ヲワスレントイウテ忘レ貝ニ
コトヨセテイヒシナリ　わすれ貝等トハ前ノ哥ニテハワス
レ貝ヒロハントイヒシカドソノワスレ貝ヨモヒロハセシセメ
テ意心ヨタニモ昔シノ人ノナコリ又ハカタミトモ思ハン
ト也子ヲ愛スルアマリ玉ニタト〈テイ〈リ萬葉ノ五ニ憑
男子古日歌ニ白玉之吾子トアリ
女ゐのうあまを釈をきれくなりぬべしまあ〜ぶ先あり
久んをと人いそんやされど乞ものをと為ものをと人ハいそんやされど乞ものをこのあはよとのまきき

玉吟　家隆

袖ハ又おきつの濱も
あら〳〵波のあらつきうけ
て田鶴そ鳴なる

凡ソつまハ夫ヨリ
婦ヲヨヒ兄姉ヨリ
妹人ヲ云ハモトヨ
リニテ弟ヨリ姉ヲ
指テモ他人トチモ
女ヲシカ呼ヒ女ト
チモ互ニ指テ云ヘ
男子ヨリ叔母ヲサ
シ事万葉ニアリ同
集ニ
妹といへハなめしかし
こ〳〵あらすらにかけ

といふやうもあり狩ハれ〳〵而に日をくるるまをなげ
きてあるる女のよあるう〳〵（イナシ）
手をひてさむけ〳〵ぬいつくるぞくむとそなし（定）
まひごろへよりる
親をさうなくトハ原本おやせさうなくトアレト今諸本ニ
ヨリテ之ヲ改ム女児の〳〵め等トハ親ノナラヒトシテ子
ノ爲ニハ何コトモウチワスレテヲサナキヨウニナルトカリ
ゑな〳〵ず等トハ親ノコヽロトシテ欲目ニテ玉ニタトウ
ルハカルヲモ（トモ）人ノ眼ニハ玉ノヨウニモアラストイハン
トナリ　ゑあしこのほよろりトハ今俗ニ云死ニシ子器

まくかしき言あるもの
かな

サレハ数ヲヒトニハ
妹トハイハヌコトニ
ヤトイヘリ出和訓
栞巻二
万葉云
さう木あもよハふゝと
ふをうつゝへるゑつま
といへハふきぬものハ
又云うつたへるまうきの
袂ゝまくゝ
又云うつゝへるをいえ
まあと

量ヨシト云是ヒ也妙壽院本ニハ死顔ト文字ニカキア
リ今ハ爲家卿本附注本等ニヨリテ之ヲ改ムをひ
て等トハ國ノ名ヲイツミヲ泉ニトリナシタリサレト
マコトノ泉ナラ子ハ手ヲヒテ、サムサモシラヌイツシト
イヘリ
五日々ふこの〳〵（うイ）ていづゝれなゝごよ栄小津乃とま
アまをおよ松系めもたるゞなりこの君（こきゝれ）為これくるし（ルふれ）
バよ（バイ）ゑ（定ナシ）ゑ〳〵
わけどなを不ゆきゆ〳〵れぬそいゝもゞうむをつの浦（小津）
なるさ〳〵の松系のくいひつくるわどよゝ丹とくこ

げ日のよきことをとそよのわせだかぢとをふなこども
にいたくこゝふねよりおりてこぶなるあさぎこれいで
こぬさきこつなでたやそけとゝのみさのことぞの哥の
やうなるもこのぢとをれおのづゝ乃河なりこのち
とゝまハうつこゝまとゝき哥れやゝれるすいみとま
えあゝぐきてゝ人のあやしく哥めきてゝれいへるこのあ
とそこのきいぐせれバゝよ三十文字あまり書きり
小津ハ大津ナリ和泉國和泉郡ナリ今紀州街道ノ
駅アリ半ハ下條郷半ハ宇多荘ナリ名所圖繪巻三ニ
澳津濱ノ細注ニ大津々ノ一名トアリ今考ルニ大津

ハおきつなまの畧ナルヘシそれゝハ書紀不葉ナドニ
そろくアリろトるハカヨヒナレハ今ハルくトイヒテ遥ナ
ナル意ニトルナリくるトハ歸京ヲイソクナレハ松原ノ
ハルカナルモイトクルシト也ヨけとなをノ哥ノ意ハサキ
ニモメモハルくトイヒテ山中ノ松原ノハルカナルニ倦タル
ニ麻ヲ紡ヲイヒカケタリいルハ妹ヲ云いハ發語もハム
カラ義万葉ニ孀ヲモヨメリ原本ニ白きやられねバ
トアリねトぬとの誤リナレハ今諸本ニヨリテ之ヲ改ム
ふなこどル等コノ文原本舟ごとよいたくトアリテ
もノ字ヲ脱ス今諸本ニヨリテ之ヲ補ウ〻こゝふねよ

いのる祈禱ヲ云忌宜ルノ美ニ新撰字鏡ニ記又詑ヲモヨメリ忌ムハ敬ムノ謂ニ

鴨和名加毛米兼名苑云一名鸞

更級日記云くるの人々あつまりきてそめ夜このうゝをいでさせくまひていゝ様につかせまへゝまゝかいやりてこの四五日なごり形くなりなまゝなゝいふこゝろわ

リ等コノコトハ、カチトリノタヾノ詞ハナレト哥ノヨウニキコユあさきゝハ朝ノ北風摩耶山嵐ヲ云ナルヘシ万葉ニあさごちトアルタグヒナリうつたへトハヒトヘニト云詞ハ也かきいゝせハ等今云クカキテイタセヨ見レハマコトニ哥メキテ三十文字アマリナリトナリ

ひかるゝれ多そと人ゝ云ねもそよいの歌ゝ為ひぬもまゝるゝなゝくれの為

あゝのく風波ゝてずいゝ〜この九月むきあてあそぶ和あり京れちゝづくよろこびのあまりにはるゝ為ハ

定ナシ

ハ社よめる歌

六帖三貫之

いのりくるこのゞ手ゝと六帖定ゝまぬゝ名ゝよをあやなくゝるこのそあ

下ノ四十七

そうまゝこゆ

あゝくうゝは風もりさゝもゝあ〜〜いゝつの波ゝきゝなまゝ

ゝゝバ

更級記ハ菅原孝標ノ女ノ著ス丈ナリ即チ祐ヨ内親王ノ侍女ゝ兄定義ハ和泉守ニ任シテ和泉ノ國府ニ居ストアリ

授津名所圖繪巻一云住吉ヲスミノ江トヨム事古人ノ例テ万葉ナトニ其例

さゝぐゝる六帖波と見ゆしんとゝいひくゆくあいゝごよ石津とゝみ形の松系ゆゝ〜ろくてをまゝ〜〜〜又すゝよゝ社ゝこををこゞ為くあゝ人のよめる

いまゝんてゞ身をハ〜も定ゝ里ぬる伯の社れ松ゝ繁ききゝよゝまきゝそ為よゝ為ゝてよむゝ〜つ人社もく

ひと日ゝ〜こ時ゝ見ゝまきゝねゝゝよゝ為ゝ為ナシ

住のゝ江ゝまゝあさゝ〜よゝ為てゝ見すれゝゝきゝ為ゝ〜あり

やとつゝゝゝゆくゝ為ゝ為ゝとなんゝうつゝゝへゝよゝ見すゝ為なんとゝ

ハあゝゝで刻きゝゝてゝちゝゝゝゝ〜やゝゝめくゝ又ゝゝ為ゝ為ゝこゝあゝ

ちゝらにせんとなゝるゝゝし

多シ近江ノ日吉モ古事記ニハひえトアリ凡テ吉ノ字ヲ元トヨシテモヨキコトニモナルヒヨトえトハ相通ニテよい日和えい日よりと云テモ同シコトヒ住吉トヨムヨト延喜已後ヒ和名抄草類云萱草蓋名苑云萱草名忘憂漢語抄云和順礼久佐俗云加環藻二音大坂繁昌詩前編巻下云今深見分赤白

いましのしハ助字上ノ正月十一日ノ処ニ辨スルカ如シこのもめむれあてトハ原本ニハもめもむきあてトアルヲ以テ今諸本ニヨリテ之ヲ刪ル鴨ハ水鳥ナリむれあるハ群居ノ義也いのりくるノ哥文ノ如シまハ風ノタヘマナリカモメハ白キモノナレハ浪ノ如クミユトナリあわなきハ真淵云ノ無文ノ意ヨテわらちのなきこ事なりコノ哥六帖ニ出テ六帖ニハこのもめさへでトアリ今ハ諸本ニ隨ウ考証ニハ鎌倉右大臣ノ集ヲ引テすゞだよトイウ詞ハアルヨシ記セリ此処モさつゞ丹トシヲキコユ石津ハ泉州大鳥郡堺ノ廿町餘ニ在リ上石津下石

黄雋以供兒戲謂之忘却貝

古今　貫之

道志〻ほつみよもゆゝむ住のえの岸よおふてふ憂ワすれくさ

同　忠岑

住吉〻あ万ハ先とも名ゝのすなゝ忘草生〻いふなり

忘貝万葉新勅撰

讀人不知

い〻なあ〻ハひろひよ行む住江の岸よ〻〻てふ憂忘れ貝

忘水　藤原範綱

津ト云ヒ〻〻ヒよしのつてりハ攝津國住吉郡住吉ノ浦也津國風土記ニ住吉大神現レテ天下ヲメクリ住ヘキ國ヲ覓玉フニ沼名掠長映ノ前ニ到リコレソ真ニ住ヘキ國也トテ讃玉ウテ真住吉ト称シ御社ヲ定ム今ノ俗之レヲ畧シテ只須美乃叡ト云又住吉勘文ニ真證鏡ヨリ出テマコトミスミキヨシト云義ナリトアリいまゝて等ノ哥ノ意ハ住吉ノ松ハトシフルモノトカ子テハ思ヒツルニ今テミレハワレハナヲフリマサリケレハ我身ノホトヲ思ヒシリ又トナリむこのつゝの母等コレハ前ニアルウセタル子ノ母也紀氏ニシカラ云ナルヘシヒト日カタトキモウセニシ子ノ事ヲワスルヽ

住吉の浦沢をの〳〵忘
水〳〵へ〳〵なるてあ
ふよ〳〵もうな
源氏夕顔云いきよ
ふ伊よもくりなく
あくがれんことを
女ハおもひやをふ
ひ云く
病床漫筆云万葉七
ヨ八舩多氣あるハ
荒海の波をちのぎ
て舟をこぎ出をを
いふ土佐日記ヨた
げ〳〵もく志ぞきて〳〵
なるも波をしのぎ

コトナシト也むらしつ〻字ハ助字也住の江等トハ
住ノ江ミ舟ヨセテワスレ草ノシルシアリテ思ヒラワスルヽコト
モアランカト若シフスルナラハツミテユカントナリ忘草
ハ名所圖繪巻一ミ古今ノ傳授ナクテハ容易ク人ハシルヘキ
ミアラス歌道ノ家ミヨリテ明ムヘシトアリ紀ノよりさと
住吉ノ浦ニ行テ忘レ草ヲ尋ケレハ美女ニアヘリ来會
ヲ契リテ別レケルニ後ノ日ユキケルニカノ女来ラスツレ〳〵
トシテアル所ニ蛙ノ濱ヲアユミユク跡ヲ見レハ哥アリ
住吉の濱のうるめもわすれ袖ぢかりする人みま
た忘れそり

てもく命の遁くなり
後撰雜三詞書云入
のやまよりかへり
〳〵なんありつる
といひけりそれハ
云く
拾遺意四　よみ人しらず
なけきてる入いる山の
もとにかへるかへり
〳〵くもなりもるかるる

コノホカニ忘レ貝ト云アリ是レハ住吉ノ海濱ノ名産
也又忘水アリ是レハ淺澤小野ノ細江ノ流レヲ云欽已
上忘草忘貝忘水之レヲ住吉ノ三忘レト云うつゝへハ
前ニモ云ひとへト云コト也前ノ哥ニワスレントヨメト偏
ニワスレハテントニハアラスイタク憂レハ心モ苦キユヘニソ
ノ憂シキ心ヲシハシハヤスメテ憂ヒ労レタルニ氣カヲソヘ
テ又モ憂ルチカラニセントナリ
このくいひて「なげめつゝ」(仁為)るあひだ(ものいはぬ)ものくるしきて
ゆきぬべきもの(諸本)をへ志ぞきたにしぞきくるとしく
うちそめつべしのぢゆくるを死いたくこと社すくよ

社の神をそまいの神ぞこの一ほしきこゝの我おハをら
んとハいまめくゝをのこのゝぞぬさを先いまつり為まへ
といふ定ようちさがひてぬきたいまつれるこゝくたいまつれと定ナレ
もをそらこのせやまていゆゆきにいや先ゝ祝よこのぜ
なみ社ああふたすさびこのぢとりまゝいそくぬさふ
ゝきんの為り称だ所ゆ定ぬな事なほうまゝと
思ひたまふべきも此先いまつ楽ゝまへとりふまゝ定ナシ
いふよちさごひていくハせんとゝまなこもこそ
あるつあきたぐゝとつあるこのぐみをたいまつる
とて淑ようちためつまバくちをゝされバうちつ

日本後紀巻廿四云
弘仁五年九月戊子
奉幣明神報豊稔也
續日本後記巻十八
云承和十五年春三
月壬申勅奉充山城
國乙訓郡山崎明神
御戸代田二町
又云嘉祥元年冬十
十月壬申隱岐國伊
勢命神預明神例縁屋
有霊驗也
漢書巻廿五郊祀志
云使先聖之後能知
山川敬於礼儀明神
之事者以為祝

けようみをのゝこゝ社ごとなりぬれバある人のよめる
為ナリ
うた
袖中抄
ちぢやぶる神のこゝろをあるてうゝにこのぐみをい定
まてこのつゝみつるゝれいくゝ住の江社定ナシをそれ苔
きゝ社姫私などいふ神まそあ所のめをう
つりゝこのぐゝを神乃んをこそハ見つまこのぢとを為
のちろハ神社ゝこゝろな事ゝを
なつめトハ真洲云々長目 昔て物思ひありてうち
まもりある時の事なるを（みもの思ひある時な
らてハいもぬ詞也だ見るゆとのゝ思ふへゝら

梅軒雜記云明神ト云ハ公式令ニ明神御宇日本天皇詔旨トアリテ現在ノ天皇ヲサシテ申ス事ニテ神ヲサスニハ名神ト云事也シガ名ハ明ハ字音ノ同シキ故ニ通テモ用ヒタリサレト差別ハアルヘシ續日本後記承和十年夏四月丁巳山崎神預之名神トアルヲ同紀承和十五年春三月壬申勅奉穴山城国乙訓郡山崎明神御戸代田二町トアリ同神ニテ名神ヲ明神トカケル證明ヲ出スノミ仁和三年三月十四日賀茂明神春日明神トアリ此外ニ又台記久安三年二月廿二日取要春日祭大名祭四座ヒカケリ後世ニナリテハ大明神ナドヲ被授シ事モアリシ也

續日本紀巻十云天平二年冬十月庚戌

すゐりなくトハ今俗ニ思ヒカケナクナド云ニヲナシ書紀ニ不意ヲヨミ字類抄ニ卒尒ヲヨメリ意皆同シたけともくトハ万葉ノ七ニハ舩多氣トアルたけト同シ宣長云クやふねくてけハあやふき所なていろくとたくらきて舟をこぐをいひて色々と心をつくして女あひくるをたとへくる也諸本ニハこけともくトアリ是レヲ親シトスたつをへたそきよたくきてトハ舟ヲコケトモく風波ニサへラレテアトへシリソクヲ云不ヒくしくハ李吟ハコトくシク云真淵ハハテくシクト同シト云此処ハ危殆ノ意ニテちとんどト云モ同シ万葉又後ニモ殆ヲヨミタルヨクカナヘリトアリ今真淵ノ説ヲ廣クシテ云クホとんどヲ幾又殆又危ヲヨメリ幾ハ將及也ト注シ殆ハ訓近也ト注シ危ハ險也ト注セリ旧ハほとくくト云源氏ニモ見ヘタリ邉ノ義ナリ拾遺集宮造るひくのたくみはてをの音ほとくしかる目をもくし哉

是レハ杜詩ノ代水丁々ノ丁々ヲほとくトヨメリ注ニ代水声トアリ萬葉集ニモたき水こりほとくあてをのハとらまめトヨメリ源氏ニモまろでん空もほとくちうこそ見へて恐ロシキ意也ト注セリ危殆ヨリ轉セルナ

遣使奉獻海信物於
諸國名神社」

ルヘシ又六帖ナドニ程々ノ意ニ轉用セルウタアリ今ノほ
とゝハアヤウキ心ト解スヘシ住吉ノ明神トハ四神ヲ祭
ル第一ハ底筒男命第二ハ中筒男命第三表筒男命
第四ハ神功皇后也委クハ日本記ニアリ帝王編年集成
ニ曰ク神功皇后十一年辛卯四月廿三日建此廟ト蓋シ三
韓ヲ討テ凱還ノ時ニアリ依テ今卯ヲモテ祭日トスル
之レヨリ始ルナリ明神トハ魚彦云ク嘉祥ノ頃既ニアリ
ト見ヘタリ續日本後記卷十八ニ山崎明神又伊勢命神
預明神例ナトアレハ明神トハヤクヨリイヒケル由アリ既
ニ佛経ニモ大明神ヲ現ストモアリ篤胤カ俗神道云ユル
大意ニ出ル

宇津保とゝ〻ケ云
ちゝ〻ち〻まゝこゝ
ゐふゝ皇ありと名
ふゐゝゐ云く
同嵯峨院云うんの
おゝゝめゝこそふ
ゝつあれゝゝぐひと
ゝころをおやきゝ
ゝたのゝまる云々
万葉二云千盤破又
二十六知波夜夫流
古事記云道速振荒
振国神
古今打聞ニ千ハヤ
フルハ神ヲ崇ル

明神トハ人ノ善悪邪正ヲ明ニスル神ト云コトも也さいの神
ゝかゝノさいハ例ナリいまめくものカ等トハ真淵云ク
いまの世めきて物わしこゝたまふゝとゝいゝまゝさ
くひて菅原本コヽて文字ヲ脱ス今諸本ニヨリテ之レヲ
補ウいやふきゝるゝやゝちトハ考証ニ云クいやハ物ヲツヨ
クイヘルニテ古事記ニ最ヲヨミ續日本記ニ弥ヲヨメル
カコトシトアリぬさゝるハ布ハノカうぬ等是レハぬさヲ
奉レトモソレニハ布ハノカストミエテ風波モヤマサレハ舟
モ方子ハ神慮ニマ〻〻ウレシク足レリトヲモハレヌカこゝま
ふゐとの物を奉りこゝまくトハヂトリノ云ニサテソノ云ニ

詞ト云ヘリ万葉ニ
チハヤフル金ノ三
崎トアリモトコノ
崎ハ浪イトカシコ
ケレハオソレミテ
イウヘ
冠字考云ク上ツ世
ハ荒ブル神ト猛キ
人ナトニノミ冠シ
メタルヲ中ツ世ヨ
リ轉リ行テヨシ悪
ノワカチナク神ノ
冠字トノミナリタ
リ
まつ松ハもつゝ通
フ久シキヲ持ノ美

シタカヒテマナコサヘフタツアルニタヽヒトツダニナキ鏡ヲ
奉レリトヘ　うちつけまろみのごとくなりぬれハ等
季吟云クうちつけまこと〳〵あさりよといふ心ヘ
くゝみを流ているれハやうて海もろゝみのおもてのこ
とく風波なきてたひ〳〵ろゝ成ることヘ　ちはやふる
ハ彦磨云ク最早振ニテ日本書紀ニハ殘賊強暴ナト
書テ悪神ヲイヘリ今ハスヘテ神ノ枕詞也此ノ哥ノの
つみるハ鏡ノ縁語也いゝこすゝの江等トハ風波シツ
マリテイタク海ノ面スムト云ヲスミノ江ト云トカケソ
ノスミト姫松ノ姫トアラキニハニツカハシカラスト也忘レ

ナリト云ヘリ松ヲ
貞木ト云ハ両征賦
ノ貞松ニヨレリ秦
始皇松ニ大夫ノ官
ヲ贈リシハ史記ニ
アリ堅ノ書ニ二針
三針五針アリト云
此方モ同シ呉書ニ
松ハ十八公ヘトモ
湖海新聞ニ木公ハ
松ヘトモアリまつ
かさハ松卯ヘ松毬
ト同シまつふくり
トモ云

貝ハ姫松ニ對シテ云ヘ　姫松トハ委ク岸姫松ト云名所
図繪巻一云スヘテ住江ノ岸ノ濱松ヲ云ナルヘシ姫ハ讃美
ノ詞ハ或ハ云フ大神秘藏置玉ノ義トモ云惣シテ社頭
ノ松ヲ云　うつゝハ考証ニ今云俗ノウツラ〳〵ニ同シトアリ
くゝみる神の心をこそ等トハカミヲ奉リテ風波シツマリ
タレハカミニテ神卿心ヲミショトナリ　アルタハ　鏡ノ
緑語ナリ　このちとつきのハ等今カチトリノ云ニシタ
カヒテ鏡ヲ奉リテ風波シツマリタレハカヂトリ心ハ神ノ
御心トナヾレトナリ
いなとをつゝ〳〵ゆるゝよりいで、羅波の津をきて

沖の尻よりこぎ人々女もとをなきこゑの（定群）（定ナシ）（おんなおきなこゑ）（おきなおんな為）をひきもて
あてこまらひこぶこゝろゆつなゝうち舟碇乃あハ
ぢの島に臣子（おかいこ）ものこゝろなきぬといふをそまろこと
びてふなぞこよりもこゝらをとゝこげこそ（定ナシ）
うらそいへまに
いつしかうぶせのわつる謝波ぐこあ（蘆清）こぎ
避
そけてこふをそ案ずるに思ひの浦のあるこの人の
ゆ（ゆくいへれば為）ばをあやしうるこれがなこうたこちなやむ
こゑ為陰ウイ
あるあいこうこゝろんぐこ和辞（しこうべもこゝ定）ひゝみそうふを
（あゝこゝあらなイ）
似ものもあるこう和といひるる

後撰
難波ゝゝ行あもあす
ゝをつくしふりさけ
ろの方ゝはりそ
拾遺
俺ぬれハ今をゝ同ゝ
なゐはなるゝをつくし
てもあいんゝそ思ふ
年山紀聞云御釋云
字澪標ゝゝけゞ名
の意ハ水脉津蘊ゝ
てつハ助語ゝ
拾遺別詞書云師伊
周つゝへまゝの
ハるゝ川尻ゝなれ

神中秋云ゝをつくしと八川口なとに水のうき所をハ
ゝあゝいふそのみをのきしまつる木をいふゝ世俗
ゝハゝをきゐしといふをゝろゐハゝをつくしとよむ
也又水脉舟ゝゝきてゝをひきの舟とよめり又方
葉云水炊（ミヲツクシ）衝石ゝてろつくして云々國史ゝハ難波津ゝ始
立澪標の中あり云々今云水炊衝石八矢坂川口ノ洲ゝ在
リ今ノ水尾（ミヲキ）木ナルヘシ難波トハ書紀云神日本般余
彦天皇中器到難波之碕會有奔湖太夕急因以名焉
浪速亦曰浪華今謂難波訛川尻八考証ゝ摂津國
西成郡トアレトソノ地審ナラス案スルニ今ノ安治川筋

行りはるるよりは
る云々
散木集連奇
川尻よ舟のへともの見ゆる
ゆな　俊頼
〜わのぼるとそさらぐ
なるふん　俊重
東鏡巻五云元暦二
年十一月五日今日
豫州至河尻之處授
津國源氏多田藏人
大夫二罡豊島冠者
等遮前途聊發矢石
云々
續後拾　西音
絶〜〜ハ勢リ〜ハを

木津川筋ナラシカ又考ルニ川尻ハ河嶋ノ訛リタルモノ
カ河嶋ハ西成郡ニシテ一名南中島日本紀云應神天皇
廿二年秋九月分二川島縣封長子稲速別トアリ又
考ルニ淀川ノ川尻ナランカ然ルトキハ今ノ神崎川尻ナ
ルヘシ神崎ハ古ヘ水門ニシテ西海ニ通フ船トモタタカリ
シトソひたひよをあつるハ眞淵ハイタクモノヲヨ
ロコフ時ナスワサト云舟酔ハ和名抄ニ苦船トアリ
あハぢの嶋の巨子トハ前ニアルあハぢノタウメノコ
トナルヘシ巨子ハ如不ハ子トヨムヘシサテ女ノ名ノ子ノ
字ノ上何々ハ子トいノ字ヲツクル例アリ古今典侍

川嶋の小舟流のな
とおるふん
西溪叢云今人不善
築船謂之苦船云々
万葉十四云久在祢
可利曽氣
白キ條アルヲ難波
ノ葦ト云又難波ニ
ハ芦葉葦アリ名所
圖繪巻四云難波ハ
川々多シ淀川其中
ノ首タリソノ岸ニ

あまねいこ後撰ニ内侍たいこけいこ典侍あきふ
けいこ等也今ハスヘテ官女ハ尚侍何々子典侍何々
子ト云コトタクヒナルヘシいふせかりつるハ古事記ニ
悒ヲヨミカ葉ニ鬱ヲヨメリ共ニコヽロモトナキヲ云
あしこきそけてハアシコギサケテナリ此哥ノ意ハ
土佐ノ国ヲ出シヨリイツシカ難波アタリミキタランコト
コロモトナカリシニ今ハ難波江ノ菅根ヲモコキサケテ
御舟ノコヽマテキタリシト也葦トハ和訓桑巻ニ云
初メノ義ナリ開闢ノ初メマヽ生シタルモノハ葦也ヨテ
此國ヲ葦原中ツ國ト云ナリトゾいと思ひの外なる人

芦生繁リテ両葉ニ出タルモ水ノ流レ早キニヨリ隨テ皆片葉ノ如ク晝夜タヘス動ク終ニ其性ヲ継テ跡ヨリ生出ルモノ片葉ノ芦多シ故ニ水辺ナラサル所ニモアリ難波ニカギラス八幡淀伏見宇治等ニモ片葉ノ芦多シ

トハ淡路ノ巨子ラサスなやむハ病也舟君ハ紀氏自ラ云めてハ喜フコトヲ云所ろろよハ似す等トハ今マテハ舟酔シ人モ川風ニ入リヌレハウレシサマコヽロヨクナリテカラツキノウレシキヲ云也

七日はめそ川風よ舟いの者ゆてこぎのぶるに川のあらひてなやましきよこあれのぶることいとこのしかるあひだよ舟君殘病者もやそよ案こちでしきへ人よてこのろゆめのふとき〳〵よあらぶりなをうて是どし淀あのろろめれ弱よ先でこゝやこばこりよそやあゝんこのゝ〳〵くあゆき弱ゆ有案

下ノ五十六

いぶせりそのろこ八為イ

よとまて八為
そとそて八川はるり紀イ地様イ
あをあてこあれ見ぶ
すもなづむろあこのれこれそやをひをそれバよある
なるべしひとうこまことのあのねバ今ゆとつ
とくと思ふあなやまひそよゆそよめるれんの
あきなりなるべし定をこあうこハこゝやこちのくなりぬるよ
ろこびよゝこずしているあるべし淺瀬乃ごの妻に
おとそきをねるきくいえぶゝまゝ元のをやくゝやゝぶる
うちよいのてねまるなりで有日ハ
川の水ひてトハ川水ノヒタルヲ云ヨテ舟ノユキナヤミワツ

ひてハ俗ニ云ヒヤカルナリ

季吟ハ川ノ堀江ト解シ真淵ハ川ノホル江ト解ス

万葉集云父母不令知子故三宅道乃復野草乎菜積来鴨

古事記云難波入鈴舟〳〵ヤ腰なブシ源氏云なづみてむつゝりヒ上煩ノ字ノコヽロ日本記ニ頓瀆ヲヨメリ馬ノナズムヲ云俗ニなつなふむトアルハナスミフムノ美ノ誤リタルニヤ

ロウ也こゝくハ骨ミシキヲ云則チ無骨ミシテ歌モヨミエヌト云也ミやこぞこゝろく都ヘ近キシラヨロコヒホコルヲ云ヲミとゝてハくきハよノ誤リナランカ若シよトスルトキハ淀ト云コトニテ淀川ノコト也コノコトヨク考ヘシ川のゐりロハ捨葉本川のゐり地トアリ案スルニ地ト路ト普通ニテ川のぞり路ト云コトナランカ是レモヨク〳〵考ウヘシなゞむ古事記ニ那豆美万葉ニ難又煩ヲモヨメリ是レハ川ノ水ヒラ舟ノ滞リ煩ヲ云則チ吾身ノ病ミナツミ煩ウモカケテアリとゞと思ふ等トハトク都ヘカヘラント思フニソノ舟ヲカク滞リナヤマスハワカ為ニ水ノコヽロノ浅キソトナリ心ノ

延喜左馬寮式云凡諸節及行幸應用國飼御馬者勘量須數奏聞乃下官符令進

唯牧放飼馬者寮移當國國郎令牧子牽送但摂津国島養牧豊島牧不移當国寮直放繋

昔シ神功皇后飯匙シテ年魚ヲツリ玉ヒシ事アリ國史ニ見エ

さくらハ櫻ヲカリテヨメリ沉休文詩ニ櫻發欲然注ニ果木ノ名朱色如火然

浅キヲ水ノ浅キニカケタリ淡路のゴトハスヘテ女ヲ称シテ御ト云大和物語ニ伊勢のゴ若狭のゴ等ト云ガ如シ今ノ俗ニ娘御ト云ト同シコト也おとれりわこヽノ哥ハ誤字脱文アルヘシ解スヘカラス考証ニハ強テ考ヘテオトレルソ子タキトアリシヲ誤レル欤カク直セハコノ文ヨクキコユトアリ

八日なゝ不川孔のゐりヨイ群とりになづゝくとりとひ乃日数とゝふ

ほとゝぎすどこまでするこゝろ定ゑひ君まいねやもひおこり

ていゝくかゝむあゝ人いきくこの形ゝもの諸本もてこゝろ

ゝねてこの〳〵とこゝとゝをとゝこゝどもひそゝよいふな

王荊公時ニ山櫻抱石映松枝司馬温公詩ニ紅櫻楽令落杏花開トアルハ別品ナルヘシ神代紀ニ木花開耶姫アリテ伊勢朝熊ノ神社ニ櫻ノ樹ヲ其靈トセシコト古記ニ見ヘテ櫻宮トモ称セリ西行ノ歌アリ神名秘書ノ苔虫神モ櫻大刀自ノ神体形石ニ座リ苔ムシタルヲイヘリ思圓上人文永十年ノ記ニ小

梨いひぶ（飯地）こしてるとやこのうりやうれこそところぐ（こゝ）
よありろみをちこそれば奥そちひぞ（つる定考）（せちいこ為）（ふ用為）

とりこのひの巳牧トハ考証ニ摂津国島下郡ナリ然ルニハ雲御牧ニ山城国トアルハ誤リ延喜式ニ摂津国鳥養牧トアルヲミテモシレルトアリいさゝかなるものヲ定家本爲家本拾葉本類従本等ニハあぶ〳〵かなるものトアリ之ヲ正シトス何トナレハ下ノ文ニせちミスルトアリ又魚ヲちひすトモアリあさ〳〵かなるモノヽカハリニ米テヤリタリト見エいひぶハ飯粒ニシテ今云メシツブナリソノ誤古事記ニ飯粒ヲいひぶトヨメリ此文ノ意ハアサラケキ魚

朝熊ノ宮ノ坤ノ方隅ニソヒヘタル巌アリテ其上ニ櫻木アリ高サ三尺ハカリ此木往古已來セス是櫻大刀自ノ命ノ神体也ト見エ一宮記ニ駿河ノ淺間モ木花開耶姫トス富士モ同シ伊勢朝明ノ郡ニ布自ノ神社櫻ノ神社相並ヒ甲斐ノ國ノ金ノ櫻神社モ又此神ヲ祭サクラハ開耶姫轉セルナリト云ヘリ

ヲモチ米ヲヤリタレハ飯粒（イヒボ）シテ魚ヲツリタルナリトヲトコドモノヒソカニタムレイウ也ろようのすところ〳〵トハ上ノ正月十四日ノ條ニきみよつりたりし鯛ヨ銭ちすけれバ等トアルヲサスナルヘシせちみハ精進スルコト也

九日こてろすゝ（ナ）ちまてはあけぬの〳〵ゐをひきつゝのゝ（のゝ）ぶ（のゝるゝこそれば為）
すとゝも川のあるあけきバゐぶりのまぞゐぐるこのあ
ひぶこよ和田のとすまりのあぐれのところとりゐぬあり（満附ナシ）（廟の所）（妙ナシ）（ヨ為）
米魚ガ（ナシ）こへバゐくゝ（ゐくゝこなひつ定為）て舟ひきのぶるヨなき
さの院（満附ナシ）とりあぶをとつてゐくそ（こ附）の院むの〳〵成四ひやり
てゐすまバあれ〳〵ろのりろところなすわまちり（ル為）へなる

或ハ咲簇ルノ訓美トスきこむ反ルゝ花木ノ中ニモ開ミチテウルハシキハ櫻ニ及モノナシヨテ後世至テハ花トノミイヘハ櫻ノ專称トナレリ貫之哥ニ

樣ありまさるをなき
をなれいあたし草木ハ
おなじなくま

○うめ梅ヲ云万葉和名抄皆同シ古今ニあなうめトヨメリ熟實ノ美也重ニモ熟梅ノ名アリ或

云のそ松の木どもあ　なへ陪　ゆ在　まへ陪　ハう先の色さ
ゆるまこと人こ社いかくこそ為むこう名をのくきこ
ゆ為ふなり故惟為ナシるのここ社四ともよ故在原業平社
古今春上
伊勢物語
ゆ為のせ乃ゆ為に先てて桜社ぎこのさこ為ば喜のゆそのの
どもあうこまとしゆ為のよめる而ち松ちりいまきよ
う為ある人ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為
ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為
ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為
この〳〵ざり乃松ヨまこなるみとのよめ歌

續後撰雜上
まこ〳〵こひて世をゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為ゆ為
ぞなれまるひるとといひつぞこやこのちづくをよろ

ハ梅ノ唇音ニ万葉ニ烏梅ト書シハ音ヲ借リシナリ今云烏梅ノふすべうめニハアラス同集專ラ冬ニヨメリ今冬梅ト名ルアリ

契沖云ふり〳〵なきにあけぬる〳〵　ゆを引つこのゆれゆ
ゆよむべーまこあけぬるりにて夜をこめてゆをひきの
ゆる為ゆ為貫之集ゆ為夜の花咲ぬるをゆ
てほ〳〵ぎこにまぐ

こびつこのゆる
あけぬる〳〵舟をひきつこトアルヲ季吟ハカラ舟虚舟ト解スは是レ誤リ也契仲入江昌喜心ノ説ハあけぬる〳〵白舟をひきつゝ句ト句ヲキリテヨムヘシト解スタトヘハ忠臣藏ノ浄ルリ本ニあすの夜舟まのるへしトアルヲあすの夜白舟まのほるへしト切テヨムカコトキカシざるハ勝行也前ニ出ツ

和田の泊考証摂州西成郡大和田トアレト地理ヲ考ルニ左ニアラサルヘシ今案スルニ和田ノ泊モあるれモ地名ニシテ河内ノ国牧方近辺ナルヘシ即今ハ田地ノ字ニナリテアル由委クハ後考ヲマツヘシなすきさの院ハ河内国交野郡也

なりぬるゝふまゝるべうなる
入江昌喜云ゝ舟ハ屋舟ニ入もの〳〵ぬるゝと注せ〳〵れ〳〵ハ誤なりこれまさ〳〵貫之をえらめそのかの人ものもるゝ所ニ次の詞ようくて所をきのるゝなぎきのるゝ人といふ所を見つゝ物くとをまて人ハ所なるゝ所るべ〳〵是句讀の誤なり〳〵ろもとなさに

惟高ハ親王ミシテ人皇五十五代文德天皇第一ノ皇子也

業平ノコトハ上ノ正月八日ノ條ニアリ世ノ中ノ哥ノ意ハサカヌホトハ咲ラマチサクトキハチルラ惜ミ盛リナルホトモ雨ライヒ風ラヲソレナトメデルアマリミ心ノイトマナキヨリナヘテ世ニ櫻ト云モノ〻タヘテナクハ春ノ心ハナカ〳〵ノトカナラント也きやうある人トハ興アル人ミシテ紀氏自ラヲ云ナルヘシ千世へたる松トハ上ノ文ミシリヘナル岡ニ松木アリトイヘルヲヨミシナリ此哥文ノコトシきこひてノ哥ハ上ノ文ニなゝの庭ニハ梅の花サケリトアルヲヨメリ君トハ惟高ノ御コヲラサス世をふるやとトハ渚ノ院ヲサスソノ他ハ文ノコトシ

あけぬゝ〳〵所をい
きつゝとよむべ〳〵あ
けぬゝ〳〵のぬハふ
のぬゝり弁内待日
記云いまゝよハあ
けぬものゝ〳〵云々
このあけぬものゝ
ふれものを略しさ
る詞とハいはべ〳〵
上田秋成云ゝ孔津
國ハ生れ〳〵まハこ
のあゝりの地理大
〳〵ハあき〳〵めゝ
ルバこの鳥養すり
東北のゝゝに今を
きるべきホな〳〵こ

のくのゝるゝ人〳〵ゝ所ゆ京ものくゝるゝ時ゝ
人をどもなるのきいゝてきゝ國のゝそゝのうめる
をゝどもありけるゝ人〳〵ゝのとまるゝ和ゝるゝを
いゝゝゝつ物のゝりゝこれをゝんてむゝしゝこの
ゝゝのれ〳〵きるゝ中ゝ人ゝもをありしなくて
あゝりゝ〳〵ルあゝてこのゝる人のゝをありしなくて
くゝるゝがれ〳〵きゝいひてゝなゝるけるちゝルこゝきを
きゝていのゝあ〳〵んこのゝゝゆゝゝるゝことゝこのむゝとて
あゝるゝとしルあ〳〵ゝゝるゝべ〳〵ゝをゝゝこ〳〵ルこてルおゝふこ
とゝゝ中ゝ人ゝぬゝゆゝのゝるゝゝゝとゝこゝてゝのひゝゝちゝゝとゝいゝ

ゝる和田の泊とあ
まハ海舩の泊をる
ゝなるべ〳〵この川
節いふ〳〵へのまく
ゝ〳〵祢ゞ考ふるゝ
な〳〵あるれのゝハ
別のゝゝ

古今集目録云惟高
親王文德天皇第一
皇子母後四位上紀
静子正四位下名所
女四位官内卿天安
二年正月廿三日任
太宰權帥同十一月
任師貞親十四年七
月出家十五年二月

わよとゝまる（とゞまれり 為附）

いゝれりし國トハ土佐ノ國ヲ云昔シ土佐ノ國ニクタリシ時
ハ皆人子ナトモナカリシ今ハ子トモナトモイテキテ舟ノ泊ル
処ニテハ子ヲ抱キテ舟ニヨリノリスルヲ見テカノ國ニテウセ
ミシ子ノコトヲ思ヒ出スト也なゝりしノ哥ノ意ハカノ國ニテ
皆人ノ子子カリシモイデキナトシタルニ我ハアリシ子モ
ナクシテカヘルカカナシトナリ真淵云ク哥コノムトテカヨ
ウニヨムニモアラス思ヒシタヘヌ時ノワサ也トナリもろこし
してもドハ和漢ヲ云宇土野ハ今鵜殿ニ作ル摂州嶋

廿日薨号小野宮云
々

大日本史云寛平九
年二月薨時年五十
四按紹運録源氏系
図共曰貞観十五年
二月薨二十六歳然
據三代實録十六年
益封則二書誤今姑
従伊勢物語闕疑抄
云々

摂津名所圖繪巻五
云淀河ノ流レ鵜殿
ヨリ東ニ曲テ西ニ
流レ磯島ハ鵜殿ニ
ツヽキ河内ノ国渚

十日　えるこゝあのくのぞ〳〵ぞ

十日ハ山ノ子ゝ（そこ〳〵寄る史）ゝ多ク
来ルヲ見ルニ山のゝをれるを見て人ゝ山ハ幡のゝ
やとりよこをきて「ゝゝ（ヒナ）」こびゝく人ゝをぞ〳〵まて
つる四條の橋ノ上ハ人ゝうれ〳〵きことかぎりなゝて
よゝ左寺のゝとゝまるよゝ志ゝ西をゝめゝ（こゞめて定）ゝろゝくさ
ぞもゝすゝありこのちの海ゝろゝと楽ゝ柳ゝ（くり）ゝ
りゝる人ゝの柳ゝ（ゆの定）川のそゝこゝう川をゝゝてよ
ゝ（イ）塚
さゞれなゝよゝるあゝをバゝをゝきこのゞ弱い

村南北ニ相向フ
古今大哥所
くもゐてゝ
うひがほをさやふる月
〜うけゝれなくよこを
りふせるさやのなの山
新拾遺覊旅
中納言家持
旅人のよこをりふせる山
こえ〜なほもいくよ
ゆくか〜つゝん
朝野群載巻十六石
清水八幡宮略記云
右行敬恒時欲奉拝
大菩薩爰以去貞観
元年恭拝豊前國宇
佐宮一夏九旬已畢
欲歸本都之間以七
月十五日夜行教示
御宣吾深感應汝修
善須近都移座鎮護
國家「中略」同廿日上
京八月廿三日到山
崎離宮遷同廿五日
夜示宣可移坐之處
石清水男山云峯也
中略 録上件由恭上
公家令奏聞矣同九
月十五日下勅使令
實檢點定次宣下木
工權允良基令造天
宇實隆已了

とゝ〜ゐるこゝとぞゝ
十日ノ條ハ文ノ如シ土日ノ條ニさしのぼるハ淀川筋樟
シノホルナリ山ノよこをれるハ山ノ形チノヨコタハルヲ云ハ
幡宮ハ山城國久世郡ニ在リ山背の橋ハ水鏡ニ聖武天皇
神亀三年行基菩薩之レヲ造ルトアリ則チ山城国乙
訓郡ニ在リ相應寺モ乙訓郡也さゝむることトハモハヤ
都ヘカヘルミツキテイロ〳〵用意ヲ定ルヲ云さゝれなみハ
イサヽカナル浪ト云フト也ゐるあとぞゝるトアルゝ字
原本ニハヒトアリ今諸本ニヨリテ之ヲ改ム青柳ハモト
冠字也万葉四ニ青柳乃葛木山又土ニ春楊葛山又
五ニ波流楊奈宜トアリサルヲ右ノ巻四ノ哥ヲ今本青
旗乃ト書タリ此旗ハ旗ノ誤ト見テあをゞ〜ト訓テ
ソレニツヽサマ〳〵ノ附アハセコト乎ハヘド旗ニカヅラト云ヘキ
ヨシモナキナレハ皆云ニモタラヌ説トモ也ヨリテ今右ノ巻
十巻五ナトノ哥ニムカヘ考ヘテ青楊ト改メタリ楊ノカツラ
ハ柳ノ糸シテ造リテカシラニカヽル鬘ヲイヘリ猶モ巻ノ
五ニ阿乎夜疑遠加豆良尓志都〻等トアリ今ハ春
ノ青柳ヲヨメルナリ
十二百やまぶきよとあり定
十三百かの山吹

續日本記巻三十八
云延暦三年七月癸
酉仰阿波讃岐伊豫
三國令造山崎橋斷
材
三代實録巻十三云
貞観八年十月廿日
辛卯勅山城國乙訓
郡相應寺者元是漁
商比屋之地也往年
権僧正壹演浪氷観
行橋頭遭天暑熱上
岸風涼有一老嫗避
舍獻地壹演便在其
中聊依壇法鑛平地
中得舊佛像因縁相

十四日ノ條車ヲ京ヘトリヤリタル也むつ[illegible]トハウスラハシキ意也ウ
たてまつるトハアヤシクヨシ子ナラヌヲイヘル意ナルヘ
シおやうハ原本いやゝクトアレト今ハ諸本ニヨリテ之

十五日ノ條車率おてきまり舟のむつすさたふねより
人の家ようつることあり人のかめよろこび饗やうまくあるし饗
あるうこのあるじ主人ドもまゝあるドのよきをえらふ饗
うゝそおもゝゆいろ〳〵よこのつまごとをて家ハ人のいで
いをよくげなゝ〳〵びおやゝこの物うやけゝ考おやけゝ物イ

十二日ノ條ニとまれりトアルハ山崎川ノコト也十四日ノ條ハ

應蠻瑞頻現太政大
臣歎其希有奏建道
場即發工夫忽備輸
遂定寺名以為相應
宜賜四履永為寺堺
東至橋道南至河岸
西至作山北至大路
云々

青柳ハ冠辞ノコトナルヲ後世ハ万葉ノ哥ニヨリテ葛キ山ニ柳ノ生ヒテアルヨウニヨメルハ甚シキコトヽ柳ハ山ニ生ルモノニアラス

ヲ改ムあやゝうノあやハ礼ニテヤクハ下ヘツケタル詞ハ井ヤ
ニテ物ヲ形容スル語也花やうあてやうすゝやク等ノ
タグヒ也あくけなきらすトハカノアルシシタル家ノ男ト
モイデイリマテ礼アリテ敬ヒアカメテニクケナシト也
十六日ノ夕つくよの夕つくよハ月ノ名ついてよこれで山陰の
たなくらハ樓の陰ろまづりまづりの不〳〵のこれこのハト
ざりかぬ来うる人ハ人をぞしるぬとぞいはなる
かくく京へゆくよ旅ねして人あるドもこの屋の
らぶしるあるまずきてぞなる梨子をもてゆきしは
よりそくる時ぞ人ハとのくあ梨ハ[illegible]ものもそ

橋ハ字書云梁也
山崎ノ橋ハ中頃ヨ
リ淀ノ橋ヲカケテ
絶テナシ今ハ舟渡
シアリテ狐川ノ渡
シトモ云古ヘノ人
家ヲ南ニ移ス今ノ
橋本ノ驛是レ也
車昌遮切説文輿輪
之総名夏后ノ時奚
仲所造又斤於切輿
輪総名古史考曰黄
帝作車引重致遠少
昊時加手禹時奚仲
加馬
和訓栞中篇巻一云

定ナシ
わすれ草
このつまごとす
たなハ店ニシテ物ヲ販賣スル処也今ノ見世也小櫃の繒
トハ真淵ノ説ニハチヒサキ櫃ニ繒ヲカキテ童ノモテア
ソビ物ト云まろりのろトハ考証ニ義ヲ奉ク三ハ食物
ノ名ニハ器物ノ名コヽハ食物ノカタナルヘシトイヘリソノ
糧餅ヲ法螺貝ノカタチニツクリタルヲまこりのろ〳〵
トヱナルヘシうる人の心をそ〳〵ぬトハ山崎ノ店ニアル
小櫃ノ繒モマカリノ法螺ノカタチモ土佐ノ国ニクタラサ
リシ以前ニカハラ子トソレヲ售ル人ノコヽロカハリタリ
ヤイカヽアランシラスト也案スルニ紀氏突然童ノモ

あるし主ヲヨメリ
又主人ヲヨム神代
記ニミエヨぬ反ル
之家ニアルヌシノ
美之万葉ニあつし
トモアリ物語ニ
饗ヲアルジト云モ
意通ヘリ伊勢物語
ニアルシモウケナ
トイヘリ
大和物語云きうそ
くきよげふ〳〵むつ
ゝしきるゝなくて
云〻
宇津保友原君云あ
やしくもいのむつ
テアソヒモノヲ見テカクイヒシハ土佐ノ國ニクタル時ハ
コノアソビモノヲ童ノ爲ニカヒモトメシニ今カヘルニハ童
モナクナリタリト昔シラ思ヒ出ス感慨ノ意ヲフクメリ
モトヨリコノコトハ文ニハケレトモカク解スレハ文意イ
ヨイヨ明ラカナルカ如シ嶋坂ハ山城國乙訓郡也人あ
ゝしきろうトハイテムカヒナドニ来シ人ノ饗應セシナ
ルヘシあるすーきゝろきトハコレハアルシセシ人ノ労ライ
タハリテアルマシキワサナリトイヘル也たちてゐきし時
より人くる時ぞ人ハとゝくありけるトハ任国ニオモ
ムク時ハ疎畧ナル人モアリシカト今帰京ノラリニハ追

りしきりのつまは
ひをこまふ云く
店ハ字書ニ肆也所ニ以
置貨財物也和名多
那

諸國奇遊談云八幡
宮の北ゝ御門の不
とりふゝて神供を
そなふその神供の
時ハ糰子糰餅をもり
こまこの糰餅とい
ふゝ菓子上賀茂
下賀茂大社ふそ今
もそなふるなれ
ともこのところは
てハこゝふいふ

従ニヤムカヘナトミクル人多シトイヘルナリ
れまゝこのりことするトハソレカレ人ニモ返報ヲナ
スト也

夜ハなりて京(ミヤコ定)まいゝんと思へ(ていそぎ)こせぬ
ほどなきいてぬこのゝ川(の為)ゝ自ゝあのきあぞまこる人
このいそくこの川赤(ふゝも為)川ゝ(不定)あゝ赤ぞふち除さゝ
にこのそゝぎりをといひてある人のよめ歌
久しきゝ社ハ自ゝあひゝる桂川そこ所ゝこの夢
もこのそゝぎりを桑まこの夏ゝいゝ
ゝのまぐゝのそゝるこのなかつる桂川そでをぬて

へあのバもぬさゝる
ハ土佐日記ハ云々
とゝ見ものむゝ〜ハこ
のところまゝ考さ
ること見へこりさ
て今ハ糰餅法螺糰
粍とて三所のゝ〜さ
ちあるこ今の世の
ゝ〜ゝゝ餅きんと
う餅といふ餅の名
あるもふるきため
しなゝ〜ゝやこの時
往ふてハ糰餅をの
みなることなれど
こゝのついてふゝ
きつゝることぞゝ

てゑこゝこのぬるこのあまゝこあるゝ人よあゝ(リ定)
このゝ川ゝろゝんすもかゝゝゝゝゝでゝ所れトゝあのゝゝ
なのゝるべゝ〜あの架京(ミヤコ定)ゝうきゝゝきあまのよ歌もあ
(ゝゝれゝゝゝゝな為)
まりでおのの新花ふけてくれ(定ナシ)ぞこゝゝゝゝゝ
京よいゝ寺ゝ恨てこれ〜

夜よりて寺トハ旅粧ニテ見苦シケレハ夜ニナシテ
京ニ入ントオモヒイソキモセサリシニムカヘノ人々ナトノカ
ヘリコトニヤヒマトリテ長キ春ノ日モクレテ夜トナリ月
モイテヌトナリ桂川ハ山城國葛野郡也飛鳥川ハ和
國也久ウタトハ冠辞ニテカツラカハトイハントテ月ニヲヒ

し
禁秘御抄毎日次第
云女房御楊枝二雙
指御簾乃まがりま
ゐらせんといふ云々
落久物語云乃まり
りしてきちハきぬ
いときよげまてく
ハせさられバ云々
徒然草云久我相国
ハ殿上ホて水をめ
しけるホ主殿司土
器をたてまつりけ
ればまがりをまい
らせよとてまがり
してぞめしける云々

タル也月ト桂ノニトハ上ノ正月十六日ノ夜ニ出ルあまくも
トハ天雲也えろうノ枕詞也此哥ノ意ハ土佐ノ國ヨリ舟
出セシ折ハ天雲ノ如クハルカル思ヒシカツラ川ナレト今カ
ク袖ヲヒタスハカリニテワタルヨト也京ヘ近キショロコビ
コモルナリ一のつゝ川ノ哥ノふろさトハ眞淵ハ京ヘカヘル
ヨロコビノ深サト解スワカヨロコヒノフカケレハ川ノチカレモ
同シフカサニナカルトナルヘシ京へいりたちてうれし等
トハカヘスヘヨロコベルサマヲカケルナリ
家にいりて門にいるに月あかゝりハいとよくあり
さま見ゆきゝしよりもまさりていふかひなくぞこぼれ

徒然草野槌云貝ヲ
スリテ作レル飲器
ヲマガリト云々
和訓栞巻廿九ニ毎
日ノ御膳ノ具ヲ入
テ罷ル器物ヲマカ
リト云徒然草ニマ
カリニテ水ヲ飲ミ
シコトアリ新六帖
ニ
ひのきものはくりもつ
ぐるよ弱女の扇の音
もとゑやハワするゝ
江次第ニ空盤トア
リ盤ハ盆こ

やぶれたる家にあづけたりつる人の心もあれたる
なりけりなかゞきこそあれひとついへのやうなれば望
そのぞみてあづかれるなりされバたよりごとに物も
たえずえさせたりこよひかゝることゝ
こわだかにものもいはせずいとはつらくみゆれど
こゝろざしハせんとすさて池めいてくぼまり水つける所
ありほとりに松もありき五年六年のうちに千
とせやすぎにけんかたへハなくなりにけりいま
おひたるぞまじれるおほかたのみなあれにたれバ
あはれとぞ人々いふ思ひいでぬ事なく思ひ恋しき

飛鳥川ハ大和國高市郡ニ在リ水源畑ノ山中ヨリナカレイテ稲淵ヲヘテ細川ト合シ岡飛鳥四分等ヲヘテ今井ニ至リ蘇武川ヲヘ。十市郡ニ入ル

古今　春道列樹

きのふとい[illegible]ふ[illegible]
[illegible]してあすも川なれ
てなやさはもこゑ[illegible]

同　讀人不知

世の中ハなにか常なる
飛鳥川きのふの淵ぞ
[illegible]ふいせゐ成

[illegible]ぐうちよこのたをゝてうまれ女子乃こゑゝと丸
よこの[illegible]でいのでハのなかよ舟人丸こゝ[illegible]
てのしるゝてうちになるとの形しゝまたへば
してゐそろにゆしまきゑ人といへりちうゝ
うまれしこの[illegible]ぬるものをゝ[illegible]ゆどまわ松乃あ
るをゑ[illegible]ゆ[illegible]さとぞいへる[実ナシ]なるあこゑやゆゝん
まゝあん
ゑゝ人を[の定]拾ひちとせまみまゝこのバとゐくこのな
しきゝろきせまゝやゝすれゞゝくゝちをゝきこ
ゆゝおろのれどえつくさゞとゝまきこのくまれとく

桂川ハ大井川ノ流レニシテ舟渡シアリ舟波道也上野橋ハ十町余北ニアリ梅津ノ南ニ

讀古　定家

久方のくつゝの里のさゝよ衣おりゝへなの色ゐうつなり

彦麻呂云クヒサカタノ説サマ〳〵アレト皆誤ル案スルニ日榮方ノ畧ナルヘシ

長明無名抄云或人云貫ヲクとゝ[illegible]

遣妙やりてむ

家ゐいたりてトハ紀氏ノ家ヲ云也きゝしより九等トハ五年任國ノアヒタニ家モアレタル由無テキヽシカトキヽシミマサルアレハテシト也家をあつけたり等トハ家ヲアツケシ人ノ心ノアレハテ、疎畧ナリシユヘソト也なり垣ハ中ヲヘタテタル垣ヲ云ひとつへいハ一ツノ坪也こゑたりハ声高也いとハノパノ字ノ考証ニ衍字ト云異本ニハモシナキモアレト異本ニヨリテ之レヲ刪ラハ人ノ疑ヒアランコトヲオモヒテモトノマヽニテ置ク也コノ文ノ意ハカク家ヲモアラシタレハイトツラシトオモヘトサスカニ

きくにる家のあと
ハかての小池より
いきゝこゝ所小路
ふりハひんゞ〳〵の
ものなり
垣字書云爲須切墻
也又云畢日垣高曰
墉方言云前書トア
リ又間垣ノ義
池字書云除知切停
水池塘又云沼也穿
地鑵水也
後撰雑二　もとまさ
やれバやゝ〳〵ねバくな
ゐをえぬべゝなくるなな
かゝ一きまさ水也

クシク家ヲアツラシモノナレハソノカヘリコトセント也池
めいてくぶまり萍トハ昔シハ池ナリシ処ナレハアレハ
テタレハ草生ヘシケリ池メイテクボマリ水ツケルヨウ
ニ見ユト也ソノアレハテシサマラツヨクイワントテカクカケ
ルナリ五年六年トハ延長八年土佐國ニクタリテ今
兼平五年ナレハ前後六年也いまおひゝころそまきる
トハ松ノ木ニ今生ヒタル小松モマシレリト也是レハ下ミウ
セシ子ノコトヲイワントテマツコマツノアルコトヲコト
サラニカクカケシ也ふなひとハ季吟ハ梶取ニアラス
船ニノリテ来リシ人ト解ス上田秋成ハ舟ヨリノボリコ

枕草子云人の中り
きてこゝる文を見るに
おれどづきあまき
見つけこゝる云々

シ人ト云義ニヤト解ス評ノ云クニ義共ニ鶏肋ヲ喰フ
ニ似タリ今考ルニ衍文ナルヘシ又し人ハウセニシ人ヲサ
スソノ子ノ松ノ千年ノコトクナカクアランヲ見マシ
カハカクトラクカナシキワカレハスマシキト也又すれク
たき等トハウセシ子クコトヲ忘レカタク其情カキ
ツクサレヌラ云とまれかくまれハ兎アレ角アレナリ
やりてんハヤブリステントセスヘテ物ヲ破ルヲ云ルト
云後撰ニやれハをしトモ枕草ニハリすてたろトモ
アリやりハ破リ也カヨウノイタツラナルコトハ外ノ人ニ見
ユシモフスラハ　アレハトク破リスラント也コノ文自ラ鼻

謙ノ意ヲ入ル

首書 土佐日記箕註卷下 終

下ノ 六十九

明治十六年七月十七日 版權免許
仝 年 九月 刻成出版 定價五十錢

編輯人 大坂府平民 楢崎隆存 府下西成郡上福島村四百二十七番地

出版人 大坂府平民 中野啓藏 府下東區内本町二丁目壱番地